
エンディング・ワールド

能の無い鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンディング・ワールド

【Nコード】

N6856I

【作者名】

能の無い鷹

【あらすじ】

繰り返される退屈な毎日にくんざりしていた少年は、親友をかばって死んでしまう。次に目を開けたとき、そこは異世界。少年はその世界をどう生きるのか。主人公最強モノです。

ブログ 自由の翼（前書き）

初投稿です。

自分に文才は無く、至らないところもありますが
よろしく願います。

ブローグ 自由の翼

― 僕は空を飛びたい

― どこまでも広がる澄んだ空を

― そして解放されたい

― 自分を縛るあらゆる鎖から解放されたい

― だから翼が欲しい

― この澄んだ空を飛ぶための翼が欲しい

― 自分を縛る全てのものを引き離して飛立つための

― 白く美しい天使の翼が欲しいとは言わない

― どす黒く汚れた僕にそんな翼は要らない

― 黒く汚れた僕にぴったりの堕ちた天使の

翼が欲しい

― そんな翼を手に入れて僕は

― 世界を自由に生きたい

― 誰がなんと言おうともこの自由だけは守り続ける

———そうしていくことが僕の生きる意味

———今生きている理由

———僕は翼が欲しい

———空を飛ぶための翼が欲しい

———自由の翼が欲しい

———だから僕は………

序章 1話 つまらない日常と回想（1）（前書き）

少々遅れましたが1話です。

駄文ですが読んでくれるとうれしいです。

序章 1話 つまらない日常と回想（1）

朝――

俺がもつとも嫌いな時間帯。

なぜならこの世界はつまらないということを再確認させられるから。

しかも7時に起きてしまった。鬱だ。こんな日は・・・

「さぼるか、学校。」

自分で言うのもなんだが俺はさぼり常習犯だ。

高校からまともに学校に行って授業を受けた回数は片手でおつりがくる。

二年になってから学校には一度しか行っていない。

家には俺1人しかない。もう全員死んだ。

親戚はいなかったが親が残した金が十分にあるのでそれで生活している。

「今日は何して暇を潰すか。」

いつもは10時過ぎまでは起きない。暇になるから。

しかし今日は早くに起きてしまった。なぜだか知らないが。

「とりあえず朝飯食いにいくか。」

俺はジャージから着替え、顔を洗ってから家を出た。

外は晴天。太陽が無駄に頑張っている。

俺は某赤髪教主のハンバーガーショップに行くことを決め駅の方に進路を定めた。

この時間帯だと通勤者や登校途中の学生などがいて混雑している。

俺は大きいため息をつくと人ごみに突っ込んでいった。

店に着いたらいつもと同じくハンバーガーとポテトのセットを頼み、席に着いた。

コーヒーを飲んで一息ついてから店内を見ると見知った制服が結構あった。

正直あまり学校の奴らとは会いたくなかった。なぜなら

「なあ、あいつ・・・」

「やっぱりそうだな・・・」

「ねえ、あの人・・・」

「やっぱりそうだね・・・」

「あの噂の・・・」

「なんでここにいるんだろう・・・」

と、こんな感じにこそこそ陰口を言われるからだ。

（まったく、言いたいことがあるなら直接言えよなあ）

そう思いながらポテトをほおばる。

しかし言われる原因を作ったのも自分なので何も言えない。

はあ、なぜこんなことになったんだろう。

それはまだ高校に入ったばかりの頃

その頃の俺は今よりは荒れていなく、学校に行っていた

両親の死からも立ち直りかけていた

無論、その頃にはもうこの世界はつまらない・退屈だとは思ってい

たが

授業をまどろみながら受け、帰宅部の帰り道が一緒の連中と帰り時には遊んだりして、夕飯を食って寝る。

そんな毎日が続くのだろうな、と思っていた

だけど違った

いつものように学校へ行き昇降口で靴を履き替えようと思ったとき、下駄箱になにか入っているのに気がついた。

まさかな、と思いつつもその何かを見た。

それは手紙、一般的にラブレターと呼ばれるものだった。

内容は、「好きでした。放課後に屋上に来てください。」というものであった

しかし差出人の名前は書いていなかった

何かの嫌がらせかと思いつつも、授業が終わったら行くだけ行くと決めた

授業が終わり放課後になるとすぐ、屋上へ向かった

序章 1話 つまらない日常と回想（1）（後書き）

前回書き忘れていましたが、不定期更新です。

2話 つまらない日常と回想（2）（前書き）

早めに出せました。

駄文で素人丸出しですが楽しんで読んでもらえるとありがたいです。

疲れた・・・

2話 つまらない日常と回想(2)

屋上――

屋上に来てみるとそこには女の子が立っていた。

俺に気づいていないようなので、とりあえず話しかけてみた。

「俺を呼び出したのはあんたか？」

「ひゃっ！」

なんかすごく驚かれた。

振り向いた少女は赤面して慌てていた。

後ろ姿から予想はしていたが、前から見るとすごくわかる。

(やばい、予想以上に可愛い)

人形のように整った顔にすらりとのびた肢体、肌は白く美しい。

身長は低いだがそれがまた可愛さを助長している。

髪は白く、目が紅い為、アルビノかと思当をつけた。

(なんかウサギっぽいな)

(ゴスロリとか似合いそうだな)

などとアホなことを考えているとようやく落ち着いたのか、話しかけてきた。

「あつ、あのつ、篠宮零夜さんですよね」

「あ、ああそうだけど」

そう、俺の名前は篠宮零夜。身長は170cmくらいで体重はおそらく50kg前半。

髪の毛がのびまくっていて顔がよく見えない。ちなみに髪も目も真っ黒。

純国産の日本人だ。目つきが悪い為初対面の人に結構引かれる。

親友曰くその目つきと髪をなんとかしたら結構モテるはず、だそう
だ。信じないけど

さつきからなんか黙ってると思ったらずっと見られていた。視姦と
はこのことか。

とりあえず話しかけてみることにした。

「えっと、何か用があつたんじゃないのか？」

「はっ、そうでした。あのつ」

「私とつきあってください!!」

.....は？

周りには誰もいない。

少女は赤くなつて俺を見つめてる。

耳は至つて正常だ。

目もおかしくない。

ということは・・・

「一応聞くけど、もしかして俺と？」

「ほかにだれかいますか？」

疑問で返されてしまった。それにしてもなぜ？

なぜに俺？もつとかつこいい奴いるだろ。性格がいい奴も。

「マジで？」

「マジです」

「本気と書いてマジで？」

「本気と書くマジです」

やばいどうしよう断れねえむしろこのままつきあっちゃった方がよくねえかしきまだ会ったばかりかだけど

この子可愛いしいいんじゃないのどうしようどうしようトウシヨウ

ドウシヨウドウシYOU

ここはこの選択肢しか無い！

「ちょっと待っててもらっていいか？明日にはしっかり決めるから」

どうだ！俺の超必殺技「保留」は。ヘタレじゃねーからな。

すると少し残念そうだったがすぐに笑顔になって

「わかりました。ちゃんと明日までに決めてくださいね！それじゃあさよなら！」

あれっ？そういえば名前を聞いてなかったな。聞いておこう・・・

「ちょっと待ってくれ」

「なんですか？もうきまつちやいましたかっ？」

「いや、そういえば名前を聞いてなかったと思って」

「私の名前ですか？私は谷口凜です。おぼえてくださいねっ」

「わかった。じゃあな」

「はいっ、こんどこそさよなら！」

そうして彼女、谷口凜は帰っていった。

少しぼーとした後、冷蔵庫に何も入っていないことを思い出して

帰ることにした。

2話 つまらない日常と回想(2) (後書き)

主人公の名前がやっと出せました。性格が明るいのは仕様です。元々明るいです。

できれば休日中に一度投稿したいです
いつ異世界に行けるのかな・・・

3話 つまらない日常と回想(3) (前書き)

相変わらずの駄文ですいません。

感想にあったのですが、やっぱり1話1話が短いですね・・・o

r z

今回は長くありませんが、次話から頑張るのでよろしく願います。

いつのまにかユニークアクセスが500を超えていて驚いた

3話 つまらない日常と回想(3)

帰宅途中――

(はぁ、まじでどうするか・・・)

今までこんなこと無かったせいか、思った以上に動揺している。

クラスメイトに女子の友達はあるがそれ以上の感情を持ったことは無い。

個人的に、今回の出来事は確かに嬉しい。

前から彼女は欲しいと思っていたし、それが向こう側からきたのだ。

なによりも彼女、谷口凜は可愛い。

学校にこんな可愛い人がいたことに驚いた。

今まで気づかなかった自分を殴りたい。

(けどなぁ、俺は相手のことを何も知らないんだよねあ)

好みのだ真ん中ストライクだから不満がある訳でもない。

ただ、ほとんど彼女のことを知らないのだ。

知ってることといえば、可愛いこと、同じ高校ということと、白髪赤目なところ。

最後に、名前。ほとんど何も知らない。

それに俺はとくにいいところなどない。

長所は何か、と聞かれれば無いと答える。

なぜならそれが最も適当な答えだから。

とくに努力もせず、だらだらと過ごしているだけだから。

才能があるのに何もせず、何の意味も無く過ごしているクズ野郎だから。

ただ、昔は違った。

いままで、勉強に困ったことは一度も無かった。

テストを勉強せずに満点を取ることなど簡単なこと。

運動神経も悪くなく、同年代だったら絶対に負けない自信もある。

祖父が死んだため、今でこそ習っていないが祖父の教えのもと、古武術もやっていた。

そこでも困ったことは一度も無かった。

人生の半分以上を武術につき込んだ祖父を超えるのにも、そこまで時間がかからなかった。

そしてなにより、誰にも負けない努力をしていた。

あの頃は家族がいたから……

（昔の俺はともかくとして、なぜ今の俺が……）

あたりを見してみると、もう夕方だった。

空は茜色に染まり、遊んでいた子供が名残惜しそうに帰っている。

帰る前によるはずだった商店街はもうとつくのとうに過ぎていた。

1人で考える癖は止めなきゃな、と思いながら方向転換して商店街へ向かった。

必要なものを買った後、家に帰り夕食を作る。

家族が死んだ後、飯に困ることは無かった。

小さい頃から母親の手伝いをして、その間に教えてもらったから。

一人寂しく夕飯を食べ、風呂に入って就寝の準備をする。

自分の部屋を見してみる。

あるのはベッド、本棚、勉強机、クローゼット。

テレビとノートパソコン、そして様々なゲームのハードとカセット。
この世界はつまらないし退屈だ。でも少しくらいは楽しめないかと思
って買った。

実際やってみて気が晴れることも結構あった。

中でもはまったのはMMORPGだった。

なぜなら新しい自分になれるから。

現実から逃れることができるから。

友達ができるから。

なによりも本気を出せるから。

ただ楽しめた時間はそこまで長くはなかった。

それはあまりに強すぎたから、チートを使ってるんじゃないかと噂
をされ始めたから。

いままでいっしょにパーティを組んでた人達からも敬遠され、1人
になった。

ソロプレイでも楽しめないことは無いが、街へ行くたびに中傷され
るのが嫌になった。

だから最近はやっていない。

（強すぎの何が悪いんだよ）

とか思いながら深くため息をつく、俺はベッドに入り目を閉じた。

――明日どうするかを考えながら・・・

・

3話 つまらない日常と回想(3) (後書き)

次の次くらいで異世界に飛ぶと思います。

駄文がどんどん目立ってきてると思うので、アドバイスなどがあったらお願いします。

もちろん感想も待ってます。

4話 つまらない日常と回想(4)(前書き)

わーいPVが3000を超えた〜と喜んでる作者です。

いつものごとく駄文ですが楽しんでもらえればと思います。

自分で読み返してみte思ったけど、あきらかにキーワードと内容が違ふ。

半分くらいしか会ってないような……………

4話 つまらない日常と回想(4)

朝――――

リリリリリリリン、リリリリリリリン

俺は目覚ましの音で目を覚ました。

そういえば目覚ましかけてたな。

時刻は6時半。開けっ放しの窓から光が差し込んできて眩しい。

「窓閉めるの忘れてたな……」

少し乱暴に目覚ましを止めると眠気を押さえながら顔を洗いにいく。

顔を洗い、朝食を食べながら新聞に目をとおす。

とくに気になる記事もなく、朝食を食べ終わると支度をして家を出た。

欠伸を噛みころしながら歩いていると、見慣れたイケメンを見つけた。

「おはよう、皓」

「おはよう。いつになく早いね、零夜」

こいつは高校になってからの友達で、妙に気が合い今では親友になっている。

名前は白崎皓【あきら】だ。

だが、親友ということを経済的にしたくなるほどむかつかうことがある。

まず、この明らかにかつこいといしか言いよの無い容姿。
茶色いふんわりとした髪の毛にさわやか系の顔。

すらりとのびた手足に優しそうな雰囲気を出している。

次にこの完璧超人ぶり。

部活はサッカー部に所属しているが、あり得ない運動神経。
全国模試でトップにくい込む頭の良さ。

おそらく俺をぬかせば日本一の優秀さだろう。

だが、俺はこいつには勝てない。

なぜなら性格がとんでもなくいいからだ。

まさに聖人君子だ。

この二つなら俺はまだ許容範囲だ。

最後の一つのせいで俺はこいつを殺したくなる。

なぜならこいつがモテるからだ。

こいつはかなりのお人好しなので困っている人を放っておかない。

イケメンが助けてくれて、女子はどうなる？

そう、惚れるのだ。

しかもなぜかこいつの周りに困ってる人（しかも女子ばっか）が大

量に来るせいで

こいつの周りは女子ばかりでリアルでハーレムを形成している。

（本人無自覚）

しかも俺まで皓を狙ってると思われる。

俺はホモじゃねえっ！

少々脱線したがこいつに関してはこんな感じだ。

「は、俺は何を・・・」

「いきなりどうしたの？」

「いや、何でも無い。それよりお前朝練は？」

「今日は珍しく休み。零夜はずいぶん早いじゃん」

「たまたまだ。それよりちょっと相談に乗ってもらいたいんだが」

相談することはもちろん屋上の件だ。

ついでに言うと、こいつ相談に乗るのが異様にうまい。

だから安心して相談できる。

それがハーレム増加を加速させているのだが・・・

「相談？別にいいけど、なに？」

「昨日俺告られたんだよ。とりあえず保留にしたけど」

「へえ、そうなんだ。告られたんだ……てえええええええ！？」

「何だその反応はっ！確かに滅多に無いことだけど……」

「ご、ごめん。ちよつと驚いちゃった。えつとそれで？」

「いや、今日までに決めるって言ったんだけど」

「まだ決まっていな」と

「そういうことだ。そこでお前に相談したかったんだが」

そこで俺はいったんきつて

「どうすればいいと思うっ?」

「そうだね、僕は零夜の好きなようにすればいいと思うよ」

「なんでだ？」

「零夜のことだから答えは決まってるはずだし、零夜の選択は正しいと思うからだよ」

「はあ、お前にはかなわないよ」

「ははっ、どういたしまして」

（やっぱり嫌いにはなれないな、皓は）

そう思いつつも吹っ切れたのでさっさと答えを言いにいこう。

「ありがとな、俺は先に行くからじゃあな」

「わかった、頑張つてね」

「おう」

そういつて俺は学校まで走っていった。

・
そういえばいつどこで会うか行つてなかったような……………

学校に付いた後、俺はとりあえず屋上に行くことにした。

最初にあつた場所だし（まだ一回しか会っていないが）何となくいる気がした。

階段を三段飛ばしくらいで駆け上がり、屋上のドアを開けた。

（いた）

彼女は手すりから町の様子を眺めていた。

ドアの開く音に気がついたのかこちらを向き期待した目で見つめている。

「おはようございます、きまりましたか？」

「おはよう、決まったよ」

俺は大きく息を吸ってから言った。

「結論から言うと俺は君とはつきあえない」

「そんな……」

やばい。すごい泣きそうになっている。

「ちょっと待ってくれ。それはあくまで結論だ」

「何が違うんですか？」

「さっきも言ったように俺は君とはつきあえない。なぜなら俺は君のことを知らないからだ。

だから俺はいきなりつきあうんじゃない。友達から、1から始めようと言いたいんだ」

「それはどういう……」

「つまり、友達からお願いしますということだ」

「え？じゃあ私にもまだチャンスはあるって言うことですか？」

「まあそついうことだな」

「では、ふつつか者ですがよろしくお願いします!」

「こちらこそよろしく」

俺はそのとき彼女が見せた笑顔を生涯忘れないだろうと思っていた

（あんな毎日がずっと続いてくれれば良かったのにな）

今更叶わないことだとしても思わずにはいらなかった。

（なんであいつは死んで俺だけ生きてるんだよ）

はあ、鬱だ。

俺は食べ終わったものをかたづけ、外に出た。

学生や通勤者はとくにいなくなっていた。

（どんだけぼーっとしてたんだ俺は）

そんなことを思いつつ、暇を潰す為にゲーセンへと足を向けた。

ゲーセンにあるゲームを全てクリアしたらもう昼過ぎだった。

外に出てみると、帰宅途中の生徒が目に入った。

（げっ、今日土曜日だったか）

俺の高校は半日だが土曜日に学校がある。

学校が終わる時刻とぴったり重なってしまったのである。

何度目かわからないため息をつくとき、早歩きで家に帰ることにした。

見慣れた交差点までくると、おかしい光景が目に入った。

最近あまり会っていなかった親友が車に轢かれそうだった女の子を助けたところまではわかる。

しかし車は女の子を避けようとしたのか、横にそれている。

皓のいるところに。

彼は気がついたようだがもう間に合わない。

（くそつたれがっ）

俺は家族が死んで以来一度も出さなかった本気を出して走る。

なんとか皓を車の前から突き飛ばす。

（ギリギリセーフか・・・）

そんなことを思った瞬間全身に激痛が走り、体が宙に浮く。

（今度は助けられたな）

――よかった　そう呟いて意識を手放した――

――

4話 つまらない日常と回想（4）（後書き）

なんか無理矢理終わらせた感がありますが、気のせいということにしてください。

主人公の過去はそのうち書きます。

親友の出番が少ないと思いますが、ちゃんと出番あります。
皓が読めた人いますか？これは自分になっていたかもしれない名前の一つなんですけど。

次回からやつと異世界！

徐々に主人公の性格をが明るくなっていきます。

感想待ってます！

一章 5話 死と異世界（1）（前書き）

後少してPVが5000、ユニークアクセスが1000を超えるぞと喜んでゐるバカです。

ようやく異世界に行けた。

例のごとく駄文ですが楽しんでもらえると嬉しいです。

サアー、サアー、サアー、サアー

とても気持ちのいい風が俺を撫でている。

このまま眠ってしまいたいという衝動を振り切り、目を開いた。

辺りは一面緑で、空は澄み渡るような青。

（とてもきれいだ・・・）

しかし思った。

昔はともかくとして、今の日本にこんなところがあるとは考えにくい。

ということはここはどこなのだろう。

そして体の痛みは？

とりあえず辺りを散策してみようと思って立ち上がった。

立ち上がったことによりさらに視界が広がった。

もう一度あたりを見てみると、かなり広い草原にいたことがわかった。

そして遠くに大きな森が見える。

そして、思わず呟いてしまった。

「まるで異世界みたいだな……」

何となく呟いた言葉だったが、声に出すと本当にそうじゃないかと思ってしまった。

それが真実だと気づかないまま、
当初の目的を思い出し、遠くの方に見えた森へ行くことにした。

「ヤバい、迷った……」

周りは背の高い木がたくさんあり、視界が悪い。

元の草原に戻ろうにも、道がよくわからない。

それになんてかわからないがとても疲れている。

一歩がいつもより小さい気がする。

そういえばいつもより周りのものが大きく見えるような……

立ち止まってこっちに来てからなぜか一度も見えてない自分の体を見
てみる。

（これはどういうことだ？）

「体が、小さくなってる?」

もう一度見てみる。

「体が、小さくなってる」

なぜに? 誰が? どうして?

体がコンよろしく子供になってる。

おそらく俺が小学三年生、九歳の頃の体だ。

「そんなバカなあああああああああああ!!」

「ただ今ショックを受けています。少々お待ちください」

「はあ、何でこうなった」

なんとかショックから立ち直った俺は忘れていた持ち物確認をしてみる。

持ち物

全く覚えのない黒い服の上下と黒いマントっぽいもの。

ズボンになぜか入っていた半透明の黒い石。

（ほとんど何もねえ……………）

手がかりは黒い石だけなので、それを調べることにした。

大きさは俺の手をはみ出す程度で、なんか握りやすい。だが、それだけ。

しかしこんな石は見たことが無い。

さっきの草原といい、若返りといい信じられないものばかりだ。

この石もおそらく地球には存在しない。

（もしかしてここは本当に異世界なのか？）

その可能性も心に留めておくことにして、俺はまた進むことにした。

歩くこと1時間、周りは何も変わらず木々しか無い。

代わり映えのしない景色に飽きてきた。

（そういえば昼飯食べてなかったな）

そんなことを考えていると、急におながが鳴りだした。

考えなきゃ良かった、そう思いながらも進んでいく。

昔、祖父に修行だと言われ絶食をしたことがあるので、我慢できないほどじゃなかった

それでもつらいことに変わりはないが。

「とりあえずは飯にありつかなきゃな」

そういつて足を速めていった。

これはどういう状況だ？

遠くの方から何やら声が聞こえるからそっちの方に進んでみると、何やら大きいオオカミっぽい数匹の獣と炎とかぶっ放してる少女が目に入った。

（異世界決定だよおい）

そう思いながら見てると、戦況が変化し始めた。

互角に戦ってるように見えるが、やや少女が数に押されているらしい。

顔をしかめながら後退りしている。

オオカミっぽいのはそれを好機だと思ったのか、飛び掛かろうとしている。

（どうするか）

今の俺が行ってもあまり戦力にならないはずだ。

となれば相手の不意をつくしか無い。

失敗したら奴らの腹の中だろう。

だが、今の俺に選択肢は少ない。

ここで助けられれば飯くらいはおごってもらえるかもしれない。

あの魔法みたいなのも教えてもらえるかもしれない。

そして何より、女の子を見捨てるなど男が廃る。

助ける、そう決めると辺りを見回した。

手頃な大きさの木の棒がある。

それを拾うと、ばれない限界まで近づき、オオカミが飛び掛かる瞬間を待つ。

チャンスは一回。外せば超かつこわるい。

それだけは勘弁だなと思いつつ、オオカミの動きを見る。

群れのリーダーみたいなのが相手の疲労を見てもういけるとおもったのか、

少女に向かって飛び掛かった。

（それを待っていたんだよっ）

俺はオオカミに向かって走り出し、木の棒で思いっきりぶつ叩いた。

「キャンッ」

オオカミは勢いよく地面に叩き付けられた。

他のオオカミも完全に注意が俺に向かっている。

俺は呆然としている少女に向かって、

「いまだ！」

と叫んだ。

はつとした少女は火の玉をたくさん作り、
オオカミに向かってマシンガンよろしく打ち出した。

ドドドドドドドドドドドドドドドドッ

完全に俺に気を取られていたオオカミたちは
火の玉を避けることができず、喰らいまくっていた。

オオカミが息絶えたことを確認すると、
俺と少女は緊張を解いた。

「ありがとうございます。助かりました」

「ああ、どういたしまして」

そういつて俺は少女を見た。

少女改め、そこには美少女が立っていた。

（異世界だからなのかっ、そうなのかっ？）

とか考えていると美少女が、

「私はルルといいます。あなたは？」

と聞いてきた。

「俺は零夜だ」

そう答えた瞬間、腹がググとなった。

ルルは苦笑しながら

「何か食べますか？レイヤ君」

「お願いします……」

「では、私の家まで行きましょうか」

俺は歩き出したルルを追いながら、考えていた。

（なぜに、レイヤ《君》？）

そして自分が今9歳くらいだと思い出し、
しかたないことだと歩いていた。

――――助けてよかった。そう思いながら――――

一章 5話 死と異世界（1）（後書き）

こんな駄文を読んでくれてありがとうございます。
感想とかもらえると嬉しいです。

文才が欲しい……

6話 死と異世界（2）（前書き）

国とか種族とか魔法とか考えていて遅れました。

この調子で1万アクセスめざすぞ〜と意気込んでいるド阿呆です。
考えた割には中身がお粗末のような・・・

今回もいつもと変わらず、駄文ですが楽しんでいてほしいです。

そろそろネタが切れてきた・・・

6話 死と異世界(2)

ルルの家？————

え、ただいま。多分おそらくきっとルルさんの家の前に立っています。

え？なんではっきりしないかって？そりゃあ目の前にある家が、

「すごく、大きいです……………」

そう、とっても大きいからです。

俺が1人呆然としているとルルが、

「ようやく着きました。ここが私の家です」

「ずいぶんと大きいな」

「それは……………」

ルルの表情は硬い。

過去に何か悲しいことがあったのかもしれない。

そう、俺と同じように。

「別に無理していわなくてもいいぞ」

「……ありがとうございます」

「別に感謝されることなんかしてないし」

「ふふっ、それじゃあ家に入ってご飯にしましょうか」

そう言われ、さっきまで沈黙していた腹が再び鳴りだした。

「早めをお願いします……」

「わかりました」

ルルは苦笑気味にそう言うと、家に入っていった。

ボタン………俺は入っていいの？

俺の要望通り早めにご飯を作ってくれたルルは、まだ食べていなかったらしくテーブルの上に2人分の食事が並んでいる。

「どうぞ」

そう言われると俺はすぐさま食べ始めた。

今のうちに家の中でも説明しておこう。

家の中にはまず玄関があり、靴を脱いで入った。

こういう異世界って土足のイメージが強かったんだが・・・

玄関を過ぎると広間があり、そこから各部屋へとつながる扉がある。今俺がいる部屋もその一つで、食堂らしい。

他の部屋にはまだ入ってなくわからない。

「ふう、生き返った」

「それは何よりです。それよりもあなたが何者かそろそろ教えていただけませんか？」

やっぱり怪しいよな俺。

「俺はどこにでもいるような一般人だ」

「嘘ですね。ただの一般人、それも子供があんなところにいるはずがありません」

「ルルがその堅苦しいしゃべり方をやめたら教えるぞ」

「!？」

ルルにあったときから気づいていたが、あえて指摘しないでとおいた。

「慣れてないのがバレバレだぞ？」

「はあ、本当に何者？レイヤ君は」

「別に何者でもないよ。やっと変えてくれたな。じゃあ俺も話そう」

俺は大体のことは話した。

気づいたら広い草原にいたこと、体が小さくなってしまったこと、異世界から来たことは言えないから知識に関しては、自分の名前以外何も思い出せないということにしておいた。

「つまりあなたは本当は17歳で、記憶を失っていてほとんどの知識が無いと」

「その通りだ。そこでお願いがあるんだが」

「なに？」

「少しの間でいいからここに居候させてくれ」

俺はこの世界のことを何も知らない。

頼れる人がルルしかいないのが現状だ。

「いいよ」

だけど俺みたいで怪しい奴を奴をつてえ？

「えっと、今なんて？」

「だから、いいよ」

「本当に？」

「しつこい」

なんかついてるな、俺。

「ありがとう、ルル」

「べつにいいよ。私も一人で寂しかったし」

「それじゃ、これからよろしく」

「こちらこそ」

こうして俺はルルの家に居候することになった。

とりあえずいろいろ聞いてみたところ、

この世界は竜族、魔族、妖族、獣族、天族、人族とそれらがまとめる国と

大きな中立国によりなっている。
大まかに種族と国を話すと、

竜族は力が強く魔力も結構ある万能な種
また、竜に姿を変えることもでき、
その力は個人差はあるが下位の竜にも劣らない。
国の方針は無干渉。

我々は干渉しない。だからそちらも干渉するな、ということだ。
方針のせいで会う機会が無い為か、他種から敬遠されている。

魔族は魔力が強く力は竜族に劣るが結構強い
背中には悪魔っぽい羽が生えており、
自由に出したりしまったりできる。
魔法のエキスパートだ。

国の方針は吸収。
知識などを吸収し、他国を侵略して領土を大きくしようという魂胆だ。

まあ今は侵略などはしていないらしいが。
人族、天族に嫌われている。

妖族はエルフみたいなもんでイメージどうり魔法や弓を使うらしい
ちなみにルルもこの種族に入る。
やっぱり耳が尖っているらしいがルルは人族と混ざったようで、
いわれるまで気づかなかったくらいだ。

自然に関する魔法を得意としている。
国の方針は竜族と同じく無干渉。
だがそこまでもなく他種との交流はある。
とくに獣族と仲が良い。

獣族は力が竜族に匹敵するくらい強いが魔力はほぼ無い

体のどこかに獣の一部があるらしく猫耳もあり得るらしい。(二二二重要)

基本的に社交的な性格が多く、話しやすい。

国の方針は交流。

多くの種族と交わり、独自の文化を築いている。

とくに妖族と仲が良い。

天族は魔力が強く力もそれなり

背中には真っ白な羽が生えており、美男美女揃い。

プライドが高く、選民意識がある。

魔族と同じく魔法のエキスパート。

回復魔法が得意。

国の方針は支配。

表立っては行動してないが、

人族の上位種として人族をほぼ支配している。

魔族ととても仲が悪い。その他は普通。

人族は力も魔力も並

基本的に俺らの世界と変わらない。

何でもできるが全て並という器用貧乏のような感じ。

だが稀にとんでもない魔力を持ったものが生まれることもある。

国の方針は獣族と同じく交流。

魔族以外の全ての種族と交流している。

が、最近是天族よりになっている。

魔族と仲が悪い。

中立国は全ての種族が混ざっている。

差別もそこまで無く、暮らしやすい。

頂点に立つのは人族。

絶大な魔力を誇っている。

その下にそれぞれの種族が集まって構成されている。

国の方針は中立。

国民は基本自由だが、他種と大きな問題は起こしてはならない。

国と種族に関してはこんな感じ。

次は魔法について。

魔法は基本7属性の火、水、雷、地、風、氷、鉄と上位の光、闇があり、

最上位として無と空間がある。

また、例外として精霊魔法、召還魔法、特殊魔法がある。

魔力は種類があり、固有魔力と自然魔力がある。

これを行使するものを総じて魔法士という。

固有魔力は体内にある魔力のことで個人差がある。

体のどこかにある魔力栓という穴から発生しているらしく、

その穴が大きいほど魔力が多いということになる。

年齢はあまり関係しないらしい。

また、使っていくと疲労が蓄積して

使い切ると最悪死に至る。

自然魔力は空気中に漂っている魔力のことで、マナとも言われる。

固有魔力の代わりとして扱うことができる。

マナは固有魔力より扱いにくいが、慣れれば魔力が少ない人でも強

くなれる。

ただし、使いすぎると周りのマナが無くなり、発動できなくなる。

普通、基本7属性のどれか2つか3つくらいが使える。

だが例外として4つや5つ、全て使えるものもいるとか。

上位の2つは使えるものはほとんどいない。

また、光と闇の2つの属性を持つことは絶対にない。

最上位の2つは特殊で、

無は使えるものは今はない。

空間も今は使えるものはないが、昔の魔法士によって建物に組み込まれたものや、

転移の魔法が記憶された魔法石などがある。

精霊魔法は主に妖族が使う魔法で、目には見えない精霊の力を借りる魔法。

精霊は魔法生命体で、強い魔力を持っている。

精霊とは契約することができ、過去にそれで強い力を持った魔法士もいたが、

今では少なくなっている。

召還魔法はその名の通り、召還する魔法である。

俺がこちらに來た原因もこれにあると思われる。

基本的に魔獣と呼ばれる獣を召還するが上位の召還になると、幻獣と呼ばれる高位のものも召還できる。

召還した後は魔法で使役される為、命令するだけでいい。

だが、召還中は常に魔力を削られるので魔力の多い人しか強いものは召還できない。

特殊魔法は他の魔法に当てはまらないものの総称で、

身体強化や回復などもこれにあたる。
特殊魔法は魔力があまり無くても使うことができ、
本人の技量で効力が大きく変化する。

他にもいろいろあるらしいが、基本的なのはこれだ。

最後に俺が今いるところは妖族の森の端っくら辺で、
中立国に近いらしい。

以上、説明でした。

（ふう、本気で何かを記憶しようとしたのは久しぶりだな）

俺は瞬間記憶能力の劣化版みたいな能力を持っている。

意識しないで見たり聞いたりしたことに關してはそれほどでもない
が、

集中して見たり聞いたりしたら完璧に覚えられる。
ただどすこい疲れる。

「どんどん説明しちゃったけど覚えられた？」

「ああ、ほぼ完璧に覚えた」

「完璧つて……………」

「そう言う特技があるんだ」

「ふーん、なんかすごいね」

「すごい疲れるしそんなたいしたものでもないさ」

本当に疲れたな。すごい眠い。

「悪いけど、もう寝させてくれないか？」

「わかった。部屋は奥にあるから」

「了解。おやすみ、ルル」

「おやすみ、レイヤ」

ルルに会えて本当に良かった。

もしかしたら飢え死にしてたかもしれないしオオカミもどきに食われてたかもしれないし。

運が良かったな。珍しく。

俺はこう思いながら意識を落としていった。

――――明日からが楽しみだ――――

――

後に彼はここに来てしまったことを生涯悔やむことになる。

だが、今の彼に知るすべは無い……

6話 死と異世界(2) (後書き)

次回は主人公にとってかなり重要な転換点になる予定です。

目指せ、総合評価100pt!

ということでご感想評価アドバイスなどお待ちしております。

あと、文章でおかしいところがあったら教えてください。

転章 狂った彼は力を望む（前書き）

一万PV突破！ありがとうございます！

主人公最強になる第一歩です。

本当に駄文ですが楽しんでもらえれば幸いです。

また、グロい描写があるので苦手な人は注意してください。
そこまではないけど

転章 狂った彼は力を望む

ルルの家だったもの――――

「どうして？」

「何でこうなった？」

答えるものは誰もいない。

なぜなら行きてる人間が周りにはいないから。

辺りは血だらけで紅い絨毯のようになっている。

その上に原形をとどめていないほどバラバラに解体された死体が大
量に転がっている。

そして、彼の腕に抱えられているのは……………

ルルと言う名の少女だった。

（ふう、後もう少しかな）

今俺はルルに頼まれた草（食べられる）を採っている。

何回もやったことがあるので採集するスピードは早い。

（もうそろそろ1年になるのか……）

俺がルルにあってからおそらく1年の月日経っている。

最初はぎこちなかった関係も今では皓と同じかそれ以上になっている。

今やっていることも最近になってやらせてもらえるようになった。

無論魔物を狩るのはやらせてもらえないが。

魔法は一応教えてもらったのだが、魔力栓が小さすぎてほとんど何もできない。

ライターくらいの火なら出せるが。

マナの方はここらへんだと少ないので同じく、

ライター程度のことしかできない。

また、遠慮というものが無くなってきたせいかな、何でも話すようになってきている。

まだ異世界から来たことは言っていないし、ルルの過去のこと聞けていないが、そろそろいいかなと思い始めていた。

（さて、このくらいにしておくか）

俺が歩き出そうとしたら、突然

ガサガサッ

「誰だっ！」

俺は音がした方に行ってみる。

見た様子何も無い。

（気のせいか）

俺は気を取り直し、帰路についた。

その選択が間違っているとも知らずに・・・

辺りはまだ明るく、昼過ぎくらい。

「ただいま」

「おかえり」

俺は先に家についていたルルに挨拶をした。

「どうだった？」

「結構とれたよ」

そう言うのと、とってきたものを入れていた袋を出す。

「うわ、ほんとだ。ずいぶん上達したね」

「まあな。あれだけやってたら馬鹿でもできるさ」

「またそう言う」

「うるさい」

軽口をたたきながらも俺は袋から採れたものを出していく。

「んー、もうちょっと欲しいかな？」

「結構採ったつもりだったんだがな」

「まあそう言わずに」

「はあ、採ってくればいいんだろ」

ため息まじりにそう言う。

「さすがレイヤ、優しい」

「調子いいなあ」

「気のせい」

「今から出たら夕方までには帰れるだろうし行ってくるよ」

「ちょっと待って」

歩き出そうとした足を止め、俺はルルを見る。

「帰ってきたらさ、私の過去のことを聞いてくれる？」

「っ！あ、ああわかった。その代わりに俺のことも聞いてくれるか？」

「うんっ！」

「じゃ、行ってくる」

俺は再び森へ歩き出した。

「こんだけありゃ十分だろ」

袋一杯になった草を見て俺は言う。

（そろそろ帰るか）

俺はルルの家に向かって歩き出した。

悲劇が待ってるとも知らずに

家についた俺は少しおかしいことに気づく。

いつもなら、俺が帰ってくると飛び出して来るのに、
来ない。

俺はとてつもなく嫌な予感がして家の中へと走り出した。

家の中は荒れており中の調度品が無くなっている。

（どうなってるっ）

そのとき、二階の部屋から微かに声が聞こえた。

「いや、やめて」

それは確かにルルの声だった。

俺は階段を二段飛ばしで駆け上がり、扉を開いた。

否、開いてしまった。

むっとしたにおいに顔をしかめながら、部屋の中を見た。

俺の目に映ったのは、

地獄だった。

部屋の中には、10人くらいの男とルルがいた。

よくわからない男にルルが押し倒され、犯されている。

両腕は縛られ、首にはナイフが突き立てられている。

ルルは扉が開いたのに気付き、呆然としている俺に向かって叫んだ。

「来ないで！レイヤっ！」

するとルルを犯していた癪に障ったのか、怒鳴って押さえつけた。

「うるせえ！お前は黙っておかされていりゃいいんだっ！」

ルルは必死で抵抗して、相手の腕に噛み付いた。

「痛っ。この女がっ！」

男はかっとなって、首に突き立てていたナイフを、

ぐさり、と首に、突き刺した。

ブシュッ、と血が噴き出す。

ルルは苦痛の表情を浮かべたまま、何か呟いた後、ぐったりと動かなくなった。

「ルル？」

「おいっ、ルル！」

返事は、
帰ってこない。

[illegible]

ルルが死んだ。その事実には俺は放心状態になった。

「あーあ。殺しちゃった」

「おい。俺の番が来なかったじゃねえかよ」

「うるせえ、ついやってっただよ」

「あそこにいるガキどうする？」

「適当にこの鬱憤を発散した後、殺せばよくね？」

「さんせー」

笑い声が部屋に響く。

この後、俺はずっと暴行を受けた。

殴られ、蹴られ、爪を剥がされ、切られ。

その間も俺は必死に現実を否定した。

痛みは感じなかった。

特に反応せず、つまらないのか、

「女の方は良かったけど、このガキはつまんねえな」

「だけどこのガキのおかげでここにたどり着けたし良くね？」

「確かに。後誰かさんが女を殺さなければ最高だったのにな」

「黙れ、俺が見つけたんだぞ」

「まあまあ、そろそろ飽きてきたし殺さね？」

「いいね。金には当分困らないしな」

どうやら俺は殺されるらしい。

そんなことを考えながらも、死んでもいいかなと思った。

「あの女もかわいそうだよなあ。こんな約束破りを好きになっちゃって」

「最後の頼みさえ聞いてやれてないしな」

最後の頼み？

俺は少し反応した。

それを見て男たちは言った

「あの女はなあ、お前に生きてって言ってたんだよ」

「結局お前は死ぬから意味ないけどなあ」

「女の方も狂ってるぜ？こんなくず好きになるんだからなあ」

そう言っつてルルの頭を蹴った。

心の中から黒いものが吹き出してきて

ぷつんっ

何かが、切れた。

「さあて、これで終わりっ」

そう言ってナイフを突き出した男の頭が吹き飛んだ。

[illegible]

気分がすごくいい。

男たちがなんか警戒してる。

「お前っ、何をやった！」

「何って何？俺は特に何もやってないけど？」

あはは、そう嗤いながら言う。

1人の男が剣を抜いてこちらに来る。

「あはははは、死ね」

胴体が消し飛ぶ。

黒い石が周りを浮遊している。

それを思いつきりつかんだ。

ついさっきまで石だったものは形を変え、

黒く禍々しい巨大な鎌になった。

背中から黒い翼がはえ、瞳は血のように紅く染まっている。
その姿は【死神】という言葉が一番似合う。

「お仕置きの時間だよ」

そう言うのと部屋にいる男全員の足を切り落とした。

「痛い？ねえ痛い？」

指を一本ずつ切り落としながら言う。

「今、どんな気持ち？」

黒い炎であぶりながら言う。

「俺は今最高の気分だよ」

内蔵を一個ずつ抉り出しながら言う。

部屋は既に血で塗れている。

「もっと痛みを感じてもらおうか」

そう言って鎌を振り下ろす。

男は声を上げて死んだ。

「あ、死んじやった。じゃあ次は君」

恐怖で誰も声を出すことができない。

1人、また1人と解体し殺していく。

「あれっ？全員死んじやったよ？」

いつのまにか一人残さず殺していた。

「脆すぎるよ、あはははははははははははははははははははははは。はあ、
ははははははははははははははははははははははははははははははははははは。
ルル」

周りを見ると、血と肉が散乱していた。

冷静になると、翼は消え、鎌はもとの石に戻り、瞳は再び黒になった。

「俺、人を殺しちゃったよ。楽しみながら」

そう言いながらルルに近づき、抱き上げる。

「ごめんな。守れなくて」

「俺はルルに対して何もすることができなかった」

「最後の頼み、それだけは達成するよ」

「逃げかもしれないけど、俺はルルの分も生きる」

「だから、許してくれ」

本当は今すぐルルの後を追いたい。

だけどそれこそ本当の逃げだと思う。

転章 狂った彼は力を望む（後書き）

ここまでが本当のプロローグみたいなものです。

ここから主人公が最強になります。

感想評価アドバイスなどあったらください。

二章 7話 あの日夢見た世界(1) (前書き)

短めですが、今回も駄文をお楽しみください。

どんだんボロが出てくる……………
文才が欲しい。

二章 7話 あの日夢見た世界（1）

森――――

（体がすごく軽いな）

俺は今、この広大な森から出ようと頑張っている。

その途中で、身体能力がとて上がっていることに気づいた。

それこそ、俺の最も努力していた頃よりも上だ。

（後は・・・魔力はどうなったか確かめるか）

あの後から魔法はまだ1度も使っていない。

黒い石にも極力触れないようにしている。

だが、逃げてるだけじゃ何も解決しない。

そう思い、ライターくらいの火力しかなかった火の魔法を唱えてみた。

《炎よ、我が意に従え》

ドンッ

ドカーン

何だこれは・・・・・・・・

えーっと、とってもおっきな火球ができて、発射された。

火球は木を押し倒しながら進み、遠くの方で爆発した。

爆心地はクレーターができてた。

ビックリしちゃったな♪

「すごい威力になってる・・・・・・・・」

それにしても強すぎるな、制御できるようにしないと。

ふと思った。

（あのとき俺はあきらかに火じゃないもの使ってたよな）

ちなみに俺は火しか使えなかった。

ということでは試してみた。

水、成功。大量の水をもらふった。冷たい・・・・・・・・

雷、成功。木が丸焦げになった。心臓に悪い・・・・・・・・

地、成功。小規模の地震が起きた。怖い・・・・・・・・

風、成功。7本くらいの木がまっぴたつ。危ない・・・・・・・・

氷、成功。周囲のものが氷付け。寒い……

鉄、成功。剣ができた。木を切ってみた。切れ味良過ぎ……

基本属性全部使えるじゃん。

でも、どれも俺があるとき使ったのとは違う。

となると、残るのは上位か最上位。

精霊魔法とも召還魔法とも特殊魔法とも種類が違う。

やってみるか。

《光よ、我が意に従え》

……何も起きない。

まあさすがに光だとは思ってなかったけど。

色からして違うし。

なんか闇っぽいな。

《闇よ、我が意に従え》

シュンッ

……何だ今の。

黒いレーザーが空へと消えていった。

なんか使えるらしい。

すげえな俺。

よし、この調子で最上位も試してみるか。

まずは無。

《無よ、我が意に従え》

「んなバカな」

周囲の木々が一瞬にして消し飛んだ。

そこにあつたという証拠が無い。

きれいさっぱり消えてる。

さすが最上級は違うな。

(空間はどうだろう)

そう思い、やってみた。

《空間よ、我が意に従え》

何も起きない。やっぱ無理か。

というかできたら逆にすごい。

どうやら俺があのととき使ったのは無と闇みたいだ。

特殊魔法もやるか。

確か詠唱は要らなくて、明確な意志が必要だったはず。

（身体強化！）

「うおっ」

体がとんでもなく軽い。

飛んでみたい衝動に駆られる。

「ほっ」

ビュンッ

「凄すぎだろ、身体強化」

地面がみるみる離れていく。

軽く10メートルは飛んでるな。

落ちてきたときの衝撃も無かった。

召還魔法は呪文を知らないから、これで今できる奴を全部試してみ
たが、

俺ってすごくない？

だって光と空間以外全部使えるし。

「これからもいろいろ試してみるか」

俺は魔法を使うのをいったんやめ、黒い石を調べることにした。

どうなってんのかな、これ。

あのときは強く握ったら鎌が出てきたけど。

とりあえず握ってみた。

黒い、刀が、出てきた。

「違っのが出てきちゃった」

その刀は長さが2メートルくらいと長めで、完全に真っ黒。

凄い切れそうだ。

なんか切ろうかと思ったら、周りに何も無かった。

そういえば消しちゃってた。

遠くの方からなんかくる。

それはオオカミもどきの群れだった。

一匹大きな奴がいる。おそらく群れのリーダーだろう。

なんでか知らないが、凄い殺気立ってる。

俺なんかしたつけ。

考える前にまずはこいつらをなんとかしよう。

とりあえずは（身体強化！）

その瞬間体が軽くなる。

ちょうどいいし刀を使ってみるか。

久しぶりにアレも使いたいし。

「さて、行きますかっ！」

俺はオオカミたちに突っ込んでく。

いきなり突っ込んで込まれて混乱してるうちに、一匹を切り裂いた。

（凄いな、この刀）

そう思いながら飛び掛かってきたオオカミを切り捨てる。

「使つか」

俺は周りを囲んで隙をうかがってるオオカミどもを見て言った。

「瞬旋」

ザシュツザシュツザシュツ

血が景気よく出る。

俺はオオカミの包围していたところから離れたところに立っている。

オオカミは5匹くらいが血を流して死んでいる。

（久しぶりだったけどうまくいったな）

瞬旋。

それは昔俺が祖父に習っていた古武術の剣術の技の一つだ。

思いつきり相手の方へ踏み込み、すり抜けながら斬りつける。

身体強化のせいもあってか、オオカミたちは全く見えてないようだった。

「一気に片を付けるか」

気分がハイになってくる。

俺は再びオオカミたちに突っ込み、斬りまくる。

残りはあの大きい奴だけ。

「いくぞっ、閃断！」

俺は凄まじい速度で距離を詰め、
頭から尻へと両断した。

「ふう、終わったか」

辺りは死体だらけ。自分の服も返り血で汚れている。

（やっぱり何も感じないか）

生き物を殺したのに何も感じない。

あのとき、人を殺しても何も感じなかったが、
それは俺がおかしくなっていたからだと思っていた。

だが、どうやら違うようだ。

（俺は壊れたのか……）

ネガティブになりそうだったのでそのことについて考えるのはやめ、刀のことを考えた。

まだ血が滴っている長い刀身。

少しおかしいことに気づいた。

表面に付着した血がどんどん無くなっていく。

（血を、吸っている）

確かに血を吸っている。

「とんでもないものを手に入れたな、俺は」

それにしてもこの刀、俺の手に馴染みすぎる。

まるで何年も使ってたかのように。

「まあ、使えればいいんだけどな」

思考するのをやめ、当初の目的である、森から出ることを思い出し、歩き出した。

――森の外に何があるのか、期待しながら――

魔法についての補足

基本的に魔法は《よ、我が意に従え》という詠唱で発動する。だが、明確に意志を示さなければ思いどおりにはできない。なので、この木を燃やしたい、などと思ったときには、

《炎よ、我が意に従い対象を燃やせ》

などと最後にしたいことをつければ、どの木にするか決めるだけで明確な意志が無くても木だけを燃やすことができる。

また、上級の魔法はそれぞれ固有の詠唱がある。

今回はこれだけだが、魔法についてはまた補足する。以上。

二章 7話 あの日夢見た世界（1）（後書き）

正直このまま続けられるか心配している作者です。
その場の思いつきと勢いでやったツケが……
投稿のペースがそのうち落ちるかも。

次回はやっと森の外の世界へ！

感想評価アドバイスなどお待ちしてます。

8話 あの日夢見た世界(2) (前書き)

遅れました。凄く遅れました。すいませんorz
一回書き終わって投稿しようとしたらPCがブチ切れ、書いた分が
全部飛びました。

また、主人公が凄く変わって見えるかもしれませんが仕様です。

後少しで2万PV・3千ユニーク突破します！

ありがとうございます。

今回も楽しんでみてください。

8話 あの日夢見た世界（2）

街道――――

「やつと森から出れた．．．．．いつか絶対燃やしてやる」

今、負の感情のパラメータが絶好調でカンストしているレイヤ君です。

ほんとね、他に言うべきこともあるだろうけどね、もういやなんだよ。

あともう一つだけ言いたいことがあるんだけど、森広っ。

トラウマだよ。森コンだよ。森コンプレックスだよ。

燃えろよ燃えろ歌いながら放火したいよ。ファイヤーッ！てしたいよ。

もう散々だよ。これほどまでに森が嫌いになったことは無いよ。

街道に出たときに思わず、

「道が、道が整備されている！視界が広い！世界が明るい！」

と叫んだ。叫びたくもなるさ。

だって、

森を歩いているときに少し開けた場所があつていつてみたら、オオカミもどきさんの集会所でした。

凄い量だよ。もう　　がゴミのようだとか使いたくなるくらいに。

で、さすがに量が多いと結構強めの魔法を撃ったら、撃った方向からオオカミもどきの増援が大量に来た。

そのエンドレス。森に居るほぼ全てのオオカミもどきを狩ったんじゃないかってくらいに殺しまくった。

1匹残さず殺してからもう嫌になつて身体強化かけて2、3時間ずっと走つてやっと街道に出れた。

走つてるときも周りは薄暗く、視界は悪いし、走りにくい。

まあ時間が腐るほどたくさんあつたから色々と吹っ切れることもできたし、悪いことばかりじゃなかったけどな。

それに、魔法とか黒い石の使い方とかもわかってきたし。代償として森が嫌いになつただけど。

ついでに妙なテンションになっちゃったし・・・・・・・・

「さて、道は2つ。右か左かどちらにしようか」

俺が親友の女難に巻き込まれてから培ってきた直感から言うと、

「右、かな」

俺の直感から言うと、左の方に行ったら街まで1ヶ月以上かかる。その道中に何かトラブルに巻き込まれる。少なくとも5回以上は。

さらにいうと、そっちの方から懐かしい感じがする。

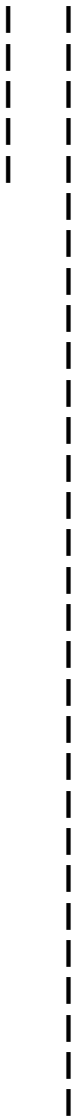
案外あいつもこっちに来てるのかもしれない。

勇者と呼ばれて、光とか使えて、ハーレムを形成しつつ魔王倒しに冒険。

本当にありそうな気がしてきた。

「やめよう。それよりさっさと進むか」

俺は考えるのをやめそう言うと右の方へ進んでいった。



「結局道中何かトラブルに巻き込まれるのが決定事項なのか！」

えーっと、今俺は商人っぽい獣族のおっさんを襲っている盗賊っぽい奴らと戦っています。

ほんと嫌になります。神様には死んで詫びてほしいです。

なぜこうなったかと言うと「くたばれっ！」「うるさい黙れそして死ね」「ぐはっ」

つたく、人が話してる最中に何をする。まあ気を取り直して、

なぜこうなった「よくもウコンを！死ねー！」「お前が死ね」がはっ

人の説明を遮るなっ！そしてなぜにウコン？ウ　ンの力なの？栄養ドリンクなの？

よしっこんどこそ「貴様、チオビタをよく」「死ね死ね死ね死ね死ね死ね」「ごふっ」

ふざけてんのか？このカスどもは。

イライラが止まらない。最近ただえさえ牛乳不足のカルシウム不足

だというのに。

あれか？この盗賊どもを殺してストレスを解消しろと？

了解。いくか。

「死に晒せーっ！」

ただいま、またとないストレス解消の機会を逃すものと殺りまくっていますので少々お待ちください。

「ふう、すっきりした」

辺りは盗賊どもの死体が散乱している。あのときほどひどい状態じゃないが。

いやーそれにしてもホントすっきりしたよ。この黒い刀も血を吸えて喜んでるし。

そうそう、この黒い石の使い方が結構わかってきた。なぜ、鎌と刀が出たのかはよくわからんが、出し方はわかる。

イメージする、それが出し方。例えば、頭の中で刀をイメージしながら握れば刀、といった感じ。

鎌も出せないことはないのだが、まだ使いこなせない。不用意に使えば、目も当てられない状態になる。

また、血を吸って何をしてるのかと思ったら血にある魔力を吸収してるらしい。

最初のとときと比べてかなり切れやすくなった。

なんかまだまだこの黒い石に関してはわからないことがたくさんあるな。

なんか矛盾してるし。

「おーい、坊主。聞こえねえのかー」

さっきのおっちゃんの声がする。どうやらぼーっとしてたみたいだ。

「聞こえる。ちょっと考え事をしてただけだ」

「そうか。それにしてもすげえな！あの数の盗賊をいとも簡単に倒しやがった！」

「そんな大層なもんじゃないよ。街まであとどのくらい分かるかな？」

「ああ、エルスだったら歩いて半日以上かかるぞ」

「なんとか日が暮れるまでにつくか」

少し急がなければいけないようだな。

「坊主、もしエルスまで行くんだつたらのせてってやるぞ」

「まじか！ありがとう。助かる」

「気にすんな。助けてくれた恩があるからな」

俺らしくもない幸運だ。妙なことが起きなきゃいいが。

「じゃあ乗れよ、早速出発するからな。そついや名前を言い忘れてたな。俺の名はガルダだ。」

ガルダって言うのか。んーどうしたものか。名前は偽名を使おうか。

「俺の名はレイだ。よろしく頼む」

「そうか、レイって言うのか。まだ小せえのに強いなあ」

あ、体が小さくなってることすっかり忘れてた。まあいつか。

「そこまでじゃないよ。まだまだだよ、俺は」

「そう言うなって。十分強いぞ」

ガルダを助けてよかったな。こんないい人久しぶりだ。

俺はガルダと話しながらエルスまでの道のりを進んでった。

「へえ、ていうことは今は文無しなのか」

「非常に残念なことにな。職も無いしなんかいい金稼ぎの方法は無いものかな」

「あるぞ」

「そうだよな。普通そんなのってあるのかよ。」

「あるぞ。ギルドに登録して依頼を受けて稼ぐんだ。レイの腕なら楽勝だろう」

「まじかよ。ありがとう、ガルダ」

「よしてくれ。それより今日宿に泊まる分も持ってないんだろ」

「ああ。だから野宿になると思う」

「金なら分けてやるよ。ほれっ、これで足りるだろ」

「俺はここら辺の金の位が分からないんだが」

「そうなのか。じゃあ教えてやるよ」

「何から何までホントありがとうな」

「気にすんな。これも助けてくれた礼だ」

金の単位

エル、ケル、ソルがあり、

1エルが100円くらいの価値。

1ケルが100エルと同じ価値。千円。

1ソルが100ケルと同じ価値。十万円。

普通の宿に泊まるには50エルくらい必要らしい。
また、飯はものによるが大体一食10エル。物価が安いことが分かる。

ちなみに、10ケルも貰ってしまった。ガルダ、なんていい奴。

そんなことをしている内に、エルスが見えてきた。

時間帯は夕方。

「ようやく見えてきたな。あれがエルスだ」

エルス。中立国エクトラインの西にある街。

妖族や獣族の国に近く、貿易が盛んで大きい都市とも言える。市場では色々なものが売っており、しかも安い。さらに飯はうまいので常ににぎわっているらしい。

「馬車に乗るのも結構疲れるな」

「慣れてないうちはきついかもな。それより1つ注意しときたいことがあるんだが」

「なんだ？」

「その黒い石についてだが、常にその刀って奴にしといた方がいいぞ」

「やっぱり珍しいからな。欲しい奴もたくさん居るだろう」

「そういうことだ」

「分かった。そうしておくよ。色々ありがとな」

「いいってことよ。じゃあな、また会えたらなんか買ってくれよ」

「もちろん。じゃあな」

いい人に会えたな。そうだ、刀だ。鞘が無いんだけどなあ。出しとくか。

あれっ？鞘がついてるんだけど。見事なまでに真っ黒な鞘が。

まさかイメージするときに鞘のことを考えていたからなのか。

なんでもありだな。この世界は。

だけど面白い。この世界は本当に面白い。まさに昔俺が夢見た世界。

案外俺はこの世界に来る為に生まれたのかもな。

「それにしても眠いな。飯食わないでさっさと寝るか」

道中、腹が減ったと行ったら干し肉をくれたしそこまで減ってない。

俺は街へ入ると街の中もろくに見ず宿屋へ直行し部屋を取った。

早速柔らかいベッドへとダイブして、そのまま意識を落としていく。

――――明日を楽しみにしながら――――

――――

8話 あの日夢見た世界(2) (後書き)

作者は壊れました。修復は不可能です。
すいません、もとから壊れてました。

感想評価アドバイスおまちしてます。

次話は明日までに投稿したいな

9話 あの日夢見た世界(3) (前書き)

鬱だ・・・死のう。

と最近本気で考えている作者です。

無理矢理テンション上げて書いたのでおかしくなってるところも多いと思いますが、楽しんでもらえればと思います。

あと、総合評価100pt突破！目標達成！ありがとうございます。
今度は200を目指すぞー！

9話 あの日夢見た世界(3)

エルスのさる場所の宿—————

「知らない天井だ……………」

まあ、昨日周りもろくに見ずにベッドにダイブしたからな。

この宿がどこら辺にあるのかもわかんねえ。迷子フラグか？

本当に迷子になりそうだな。朝飯にたどり着くことさえ叶わないかもしれない。

とりあえず今日するべきことは、

「飯探し、街探検、ギルドの登録か」

本当にどこのRPGですか？この世界は。

この世界を題材にしたMMORPGとか出したら凄く売れる気がする。

「ふあゝ、それにしても眠い。眠すぎる」

まずは顔洗ってくるか……………

ということと顔を洗ってきて目が覚めた。今は支度をしている。

それも結構長時間。支度することなんて殆どないと思ってたけどな。案外あつたんだよ、色々な。例えば、

「こんな長い刀をこんな低身長【138cm】が持ち歩いてたらおかしすぎるよなあ」

だって10歳だよ？第一持ち運びに不便すぎる。

なので、いったん黒い石に戻してから今度は小さい小刀をイメージしてみたり。

結果としては出来た。大きさは50cmくらいの、やはり真っ黒い刀が。

ちゃんと鞘もある。だけどさ、何で2本もあるわけ？

結局何度やつてもこうなつたので2本とも腰にさした。

なんてことがあったり、

「俺ってこつちに来てから1度も服替えてない気がする」

と気がついたけど、なんで誰も服が汚いとかくさいとか小さいとか言わないんだろうと思ひ、

よく見てみたら汚れ1つない。返り血をとんでもない量浴びてるのに。

それとなんか大きくなってる気がする。

俺も一応こつちに来てから成長している。来たばつかのときは120後半だつたし。

この真っ黒な服は来たばつかの俺にジャストフィットしていた。

今の俺も全く違和感無く着ている。

服も成長してるよ………

結論、俺の持ち物にはろくなものが無い。

なんてことがあったりして出かけるまで時間がかかった。

ようやく支度が終わり、出発することにした。

まずは朝飯。目指すは露店。いざ出陣！

俺は露店の密集しているところに向かっていった。勘で。

「なんてことだ。俺としたことが……………」

くそっ、ホントになんてことだ。なんで露店を目指していたはずなのにこんなところに居るんだ。

迷子フラグを建てたのが悪かったのか？そうなのか？ごめんなさい。謝るからなんとかしてこの状況。

「助けてー！ドラ モーシ！」

もちろん来るはずも無く、むなしいだけ。この世界に来てから厄介ごとに巻き込まれなかったこと無い気がする。

とりあえず状況を整理しよう。まず、俺は路地裏になぜか居る。

そして、目の前にとても可愛らしい美少女がいらっしやる。（この世界美少女率高過ぎだろ・・・

その周りを、騎士系装備をフルにした方々が囲んでいる。そして少女が涙目で俺をガン視。

それに気づいた騎士？の方々も俺をガン視。正直見なかったことにして帰りたい。ボクハナニモミテナイ。

迷子フラグは建てたかもしれないが美少女救出フラグは建てた覚えがないぞ。

よしっ、とりあえずは話してみよう。かの有名な偉人もこう言った。「話せば分かる」と。

「あのーすいませ「何だ貴様は！」サーセン」

怖いよこの人達。目がイっちゃってるよ。ヘルムで見えないけど。

だけど俺には見えるんだ！明らかに俺を怪しんでいる。

「たっ助けてください！追われているんです！」

お嬢さん。ここでそれは無いでしょう。普通に考えて俺に助けを求めるなんておかしい。

………なんか言わないと。この沈黙は精神的にもきつい。

えっところいうときは、そうだつ。あれがあつた。俺、行きます！

「雷よ、我が意に従い閃光となれ！」

カッ！

「キャッ！」

「うわっ！なんだ。目が、目が」

騎士？さん達は閃光で何も見えなくなってる。モンン思い出してよかった。

そしてお嬢さん。すまん、これも俺の平穩のためなんだ。反省はしてるが後悔はしていない。じゃあなっ！

俺は路地裏を走って突っ切る。なんか体に引かつた気がするが、気のせいであり木の精だ。

だめ押しに身体強化をかけ、一気にさっきの場所から離れる。フハ

ハハハハ、この速度について来れるか。

5分ほど走り続け、そろそろ大丈夫だろうと思い近くにあった木陰に座りこむ。

「ふう、何とも言えない虚脱感」

なんか疲れてるのかな、体が重い。主にさっきなんかに引っかけた方。

見てはいけない気がする。見たら負けだ。そうなんだ。

「う……ん」

幻聴だ。そうに決まってる。間違いない。

「んあ……う……ん」

チラッ

うん。見なかったことにしたいね。もう無理っぽいけど。なんでさ、さっきのお嬢さんが居るの？

引っ掛かったついてきちゃったの？おかしくね？俺の最近の運。

このままにしても埒があかないな。とりあえず起こすか。

「おーい、起きろ。起きないと××しちゃうぞ」

「起きますっ！起きますからそれだけは勘弁を！」

起きたよ。それにしてもそんなに嫌なのか、××。確かに俺もやだけどさ。

「ようやく起きたな。じゃ、俺はいくところがあるから」

そう言ってさっさと歩き出す。こころなしか早歩き。

「ちょっと待ってください」

そうだよ。呼び止めちゃうよ。仕方が無いことなんだよ。

「まだ何か用？俺急いでるんだけど」

ウザッ。おれウザッ。これは無いよ。

「すいません。ちょっとお礼がしかなかったので。助けていただいてありがとうございます」

「いや、別にそんな礼を受けるほど大層なことした覚えないし」

「それでもありがとうございます。本当に助かりました」

「私の名前はルシア・クラウスです。あなたは？」

「俺はレイだ」

これはヤバいぞ。捕まってしまった。このままでは非常にまずい。

こういうときは理由を聞いて今は無理だがいつか助けるみたいなことを言って切り抜けるしか無い。

「そう言えばどうして追いかけていたんだ？答えられる範囲でいいから教えてくれ」

「はい。実は……………なんです」

まあ、要約するところだ。

このお嬢さんはこの街に住む貴族、それも結構くらいの高い人の娘らしい。

それにとっても可愛い美少女だったせいか、年上の糞なロリコン貴族の目に留まったとか。（ロリコンは20代後半。彼女は10で俺と

同じ。

そのロリコンも結構くらいの高い貴族で、下手に行動すると危険だと。

ずっとしつこく迫っていたのだが、なかなか相手にされず、とうとう実力行使に出たらしい。

ちょうど1人で出かけているときにさっきの騎士達ロリコンナイツに捕まった。

で、そこにちょうど俺が来て、助けて今に至ると。

俺は助けたつもりは無かったんだけどな。ロリコン貴族はなんかむかつくしルシアは可愛いからいいか。

それにしてもさっきの騎士燃やしとけば良かった。あんなんに仕える奴に行きてる資格は無い。

こんなに可愛い子を集団でだよ？腐つてるとしか言いようが無い。

どうしよう。これは助けた方がいいのか？助けなきゃ俺の罪悪感がないことになる。

（はぁ、結局こうなるのか）

「とりあえずは家まで届けてやるよ。危ないしな」

「本当ですか！ありがとうございます。助かります」

「気にするな。それより道が分からないから教えてくれないか？」

「分かりました。こっちです」

俺たちは立ち上がり、進路をルシアの家に定めた。

やっちまったよ。早速だよ。こんどRPGやる機会があったらラックばっか上げてやる。

リアルラックがこんなに無いんだ。ゲームの中くらいあってもいいじゃないか。

「それにしても凄いですねーレイさんは。まだ私と同じくらいなのに」

「同じくらいっていうか同じだ。まあ色々あってな」

もしかしてこれから誰かに会う度にこれ聞かれるの？小さいのに凄いいねーって。

それはすごく嫌だ。なんとかしなければ。そして腹減った。

結局予定の何も満たせていない。あれか？予定は未定ってやつか？

どっかの親友の言葉が蘇る。

（零夜は目つきと違ってすごいお人好しだよな）

俺がお人好し・・・だと？無いな。今回もたまたまだ。助ける気は最初は無かった。

「レイさん。置いていきますよー」

（なんだかなあ）

俺はこっそりため息をつくとルシアを追いつく為に走っていった。

――何時になったら飯を食えるのかを考えながら――
――

9話 あの日夢見た世界(3) (後書き)

最近なんか更新が遅れがちですね。もともと不定期更新だけど。文章もあまり浮かばないしどうしよう。

感想評価アドバイスなど貰えると、作者のテンションが上がります。よろしく願いします！

追記 ××はこちよこちよのことです。作者もこちよこちよにとっても弱いです。

10話 あの日夢見た世界(4) (前書き)

想像以上に早い復帰でびっくり仰天な作者です。あの深刻そうな文はなんだったのか。

これからもいきなり投稿できなくなるかもしれませんが、見捨てないでください。

さて、今回は短めですがお楽しみください。

10話 あの日夢見た世界（4）

露店密集地 人、これを市場という――――

わー人がいっぱいー。人がゴミのようだー。すごいすごい。

現実逃避はさておき、レイヤ君です。こんにちわ。今はなぜか露店が並ぶどでかい道のと真ん中に居ます。

なぜなんだろう。俺はただ家まで案内してくれる彼女についてきただけなのに。

隣にはとても笑顔なルシアさんがいらっしやる。とっても殴りたい。

もう何度行ったかわからない言葉をルシアに言う。

「ルシア、家に帰ろう。そして俺の金を返してくれ」

「ん？なにかいいましたか？あつ、それよりもあの店の食べ物おいしそうですよね」

「もう金は出せないぞ。俺の生活費なんだよ。生命線なんだよ」

じ

「分かった。分かったからそんな目をするな。そのかわり後1つだけだぞ」

「やった〜！さすがレイさん。やさしいです」

本当に泣きたいよ。金がどんどん消えていくよ。ああ、NOと言える男になりたい。

だってさ、あの上目遣い反則だよ。絶対逆らえないよ。少なくとも俺は絶対に。

頭の中に何か曲が流れてくる。

「じゅんせい楽無きや苦じばかりさ〜」

分かりにくい。さーせん。

とりあえず腹は減ってないさ。俺も一応食べたから。それにしてもなんなのあの耳。

自分にとって都合のいいことしか聞こえないんじゃないのか？

むしろ俺の金がなかったらどうなっていたんだろう。

この少女、自分は金持っていないのにどんどん買っていく。俺が金を出して当然という顔をしてる。

俺の価値って……………

そんなネガティブ思考をなんとか中断してこれからについて考える。

大幅に予定が狂ってしまったが、この荷物ルシアを届ければ特に変わりは

ない。

今度から何らかのイレギュラーが入るの前提で予定建てようかな。

いつそのこと全てが悪い方向に向かうことを決定事項にして考えよう。そうだな。それがいい。

中断したはずのネガティブ思考を再開すると、ルシアがようやく満足したのか露店ストリートから離れていく。

俺は再び思考を中断し、それを追った。金のことは考えないようにして。

もうでっかい家を見ても驚いたりしないもん。そうここに誓う。

あえて描写しないでおう。つまりそれだけでかいということだ。

金持ちなんて死んじゃえばいいんだ、と俺は思う。

「レイさん。中に入りましょうよ。まだお礼もしてもらってないし」

「ああ、今いく」

どうやらお礼とかはきちんとしてくれるらしい。こういうところはいいのになあ。

とりあえずついていく俺。決してメイドとか見ていない。

十人の完璧にハモっている「おかえりなさいませ」とか聞いてない。

欲求不満なんだ。幻聴なんだ。幻覚なんだ。

そう自分に言い聞かしていると、一人のメイドさんがこちらに来て、

「お客様はこちらへどうぞ」

とか笑顔で言われた。俺は何とも言えない表情をしたままついていった。

どうやら俺はまだ神に見捨てられてはいないようだった。

というのも、あの後なんか客室っぽいところに来て、

「お嬢様が大変迷惑をおかけしました」

とか言われて、大量の金と四次元ポケットをくれた。

まずは金、その量は想像を絶する。なんと100ソル。日本円で千万円。

生活には困らないなんてもんじゃない。さすが上位の貴族様。

次に四次元ポケット、まあそのまんまだ。

具体的に言えば、ただのズボンのポケットに入れとけばそこが四次元ポケットになるって感じた。

なぜメイドさんが渡しているかというところルシアの両親は今仕事中だからだそうだ。

そういえば今回なぜこうなったかと言うと、いつも買い物についていくメイドさんが急用でいなく、それでも行きたかったルシアは特別に許可を貰って1人で買い物と言つ名の食べ歩きに行ったという。そこを狙われたということだ。

何ともまあ迷惑な話だ。ロリコン貴族自重しろ。

日本に来たら一発アウトだな。児ボ法あるし。

メイドさんもロリコン貴族がむかつくらしく、家に来たときわざとまずい紅茶で迎えたとか。

勇気あるなあとか思いつつ、聞きかったことを聞いてみた。

「何歳から結婚できるんですか？」

「10歳からです」

あえてノーコメントだ。俺は何も聞いちゃいない。

入れてもらった紅茶を飲みつつ、俺はこれから思いを馳せる。

何も無いということは無い。これは断言できる。

そして俺は逃げることにする。

「もう少しゆっくりしたかったですけど、予定がありますので今日はこれで」

「お待ちください。実はお願いが……」

やっぱ来たよ。来ると思ってたよ。このまま帰れるとは俺も思っていなかったさ。

「なんでしょうか」

年齢に似合わない言葉遣いで俺は聞く。

「お嬢様の婚約者になってください」

へ？今なんて？リピートをお願いしたら、

「だから、お嬢様の婚約者になってください」

おーまいがっ。なんてこった。展開についていけねえ。

――――そんなフラグ建てた覚えはないぞ、そう絶望した――
――――

10話 あの日夢見た世界(4) (後書き)

ここで投稿できなくなりそうになったことについて。

勉強しろ、以上。

親が受験は来年なのに気が早いんです。

まあ勉強しな過ぎの自分が悪いんですけど。

こんな調子だと、三年になったらPCが姿を消すかも。
そんなことになったら樹海へGOだ。

とこんなことはさておき、5000ユーロ突破ありがとうござい
ます。

これからよろしく願います。

11話 あの日夢見た世界(5)(前書き)

どうも、最近寝不足な作者です。

5万PV突破しました！ありがとうございます！
これからも頑張ります！

文章がひどいことになってる・・・orz

11話 あの日夢見た世界(5)

客室――――

婚約？婚約って？なんで？どうして？突っ込みどころ満載じゃん。

「すみません。よく話が理解できないんですが……」

「お嬢様と婚約してくださいってことです。まあ仮ですけど」

笑顔でそんなこと言われてもって仮？だんだん話がおかしな方向に・
・・

現実逃避したいのは山々なのだが、まずは相手が何を言いたいのか理解せねば。

ルシアがロリコン貴族の手下に捕まりそうだったこと。

俺が偶然助けたこと。

年齢がほぼ一緒なこと。

お礼のあまりの豪華さ。

この状況と言い出すタイミングを考えると一つの結論にたどり着いた。

「つまり俺が婚約者になってロリコン貴族を諦めさせてほしい。場合によっては実力行使で」

「正解です。あのいけすかない幼女性愛者^{ロリコン}に死よりも辛く惨い苦痛を与えてお嬢様のことを諦めさせたいのです」

OK俺は何も聞いてない。満面の笑みを浮かべて死よりも恐ろしい目に遭わせろなんて聞いてない。

というか断ったら俺の命危なくね？さつきからすごく悪寒を感じるのだが、気のせいじゃない気がしてきた。

「一応聞いておきますが、拒否権は？」

「ありません」

即答だ。もう逃げることは不可能っぽいな。諦めるしか無い。

「はあ、分かりました。で。具体的に俺は何をすればいいんですか？」

「はい。レイ様にはお嬢様の仮の婚約者になってあのペド野郎に××××を与えていただくことになります」

「もう少し分かりやすく」

「分かりました。まず、レイ様には仮の婚約者になってもらいいます。するとあのロリコン貴族（ペド野郎）はバカですのでレイ様を殺そうとしてくると思います」

ん？なんかおかしい気がするがまあいいや。

「それを退けてロリコン貴族（存在する価値すらないクズ）の屋敷へ行き、二度とお嬢様に近づかないように脅してしてください。別に殺してもかまいません」

もういいや。ストレス発散だ。勢い余って殺しちゃってもいいらしいし、思う存分楽しもうか。

「了解です。要約すると、ロリコン貴族（もはや人間だということすらおこがましいゴミ虫）に死の苦痛を与えればいいんですね」

「はい、その通りです。では早速準備に取りかかりましょう」

そういつてメイドさんは去っていった。まともな人だと思っていたのに……………

準備完了、といっても俺がしたことって特にないんだけどね。全部メイドさんがやってくれた。

俺の服装は特に変わっていない。なんでも、相手をバカにする為だとか。

まあさすがに髪の毛は長過ぎたので切ってもらった。なんか驚かれたが、どうせ目付きのせいだろう。今まで隠してきたのに。

ルシアは俺の後に説明（といっても一部省略されてるが）を受け、了承したらしい。

今は俺と一緒に客室より一段階くらい豪華な部屋で待っている。

何を待ってるかというと、わざとロリコン貴族に送った婚約を知らせる手紙の返事だ。

もちろん他のところには送っていない。

それよりもさっきからルシアが妙にそわそわしている。どうかしたのだろうか。

俺の視線に気がついたのか、こちらを見て顔を赤くした。真っ赤に。

「どうかしたのか？顔が真っ赤だが」

「だっ大丈夫れす！問題ありましえん！」

舌が回ってないし、本当に大丈夫なのだろうか。

俺が真剣に考えていると、メイドさんが来た。

「返事が来ました。今からこちらに使者を送るそうです」

かわいそくに。最初の犠牲者達が来る。

メイドさんがまた紅茶を入れてくれたので、それをすすりながら待つことにした。

来ました。今はメイドさんと話しています。断片的に聞こえる声から推測するに、俺と話がしたいらしいです。殺しにきたんだろうけど。

これから何がおこるかも知らないで、哀れなやつ。ちなみにメイドさんが来た奴らを担当するので、俺はそろそろ行くことにする。

「んじゃ行ってくる」

「怪我とかしないでくださいね」

心配そうに見てくる。相手のことを心配してあげた方がいいきもするけど。

「大丈夫だって。俺があんな雑魚共にやられるか」

そう言う俺は自分に身体強化をかけ、窓から飛び出していった。

ロリコン貴族の屋敷はルシアの屋敷から結構遠い。今の俺には関係ないが。

一、二分でたどり着くとばれないように敷地に侵入した。

後はあのクズの居場所が分かればいいのだが……ちょうどいいやつ見つけ。

見張りっぽいやつが歩いてくる。不運な奴。

後ろからそつと近づき、首に黒刀を押しあてる。

「なっなん」黙れ。じゃ無いと殺す」……」

「今からいうことに答える。さもないとお前を殺す。お前らの主人の部屋はどこだ」

「に、二階の一番奥にある部屋だ！言っただろ！早く解放しろっ！」

「焦るな、今解放してやるよ。死によつてな」

「なっ！？」グサッ

生かしておく気など全くない。後で面倒なことになるから。

欲しい情報は手に入った。後はいつて殺るだけだ。

え？目的が変わってる？気のせいだ。

さっさと終わらせて帰ろう。あれ？どこにだろう。宿屋でいいや。

着きますた。

コンコン

「入るがいい」

警戒心なさ過ぎだな。馬鹿だ馬鹿。

ガチャ

入った瞬間様々な魔法が俺にむかってきた。属性は様々、ただし下級のそれも弱いものばかり。

ムダなことを。

《無よ、我が意に従い魔を消し去れ》

俺に魔法が届く直前、消え去った。俺にむかつて撃たれた全ての魔法が。

部屋の中は広く、扉の周りは様々な種族に完全に包囲されていた。なぜ知ったかは分からないが、ご苦労なこった。

魔法が消え去ったことに驚いたのか、固まっている。

せつかくの機会だし、大鎌の方を使うか。

鎌を使うと理性が消し飛び、殺すだけの機械になる。だから今まであまり使わなかったのだが今回は別にいいだろう。

すぐさま変化させ、未だ茫然としている奴らに斬り掛かる。

狙うのは首。まずは数を減らそう。

「ショータイムの始まりだ！」

単純な大きさでは2mほどもあるかもしれない大鎌を身長的に釣り合っていない少年が凄惨な笑みを浮かべて首を刈る。

第三者がこの光景を見たらどう思うだろう。それほどの光景だ。

刈る、刈る、刈る、刈る、刈る、刈る、刈る、刈る、刈る、刈る、

[illegible]

家族が居るかもしれないものを刈る。恋人が待つてるかもしれないものを刈る。恐怖に顔が歪んだものを刈る。

何の遠慮もしない。

半分ほど刈り終わつたくらいでようやく我に返つたのか、剣などを構えてこちらにむかつてくる者が居た。

その後ろから魔法が飛んでくる。理想的な布陣。相手の強さが常識の範疇だったならの話だが。

それでも多少の効果はあった。刈るスピードが下がったのだ。

(うづつたいな)

俺はそう思うと鎌にかなりの量の魔力を込めた。何がおこるかは分からない。本能的なもの。

変化はすぐに起きた。

鎌が、巨大になり、より禍々しく、どす黒く血のような色になり、

持ち主の背にはいつかの黒い翼がはえ瞳は紅く染まった。

あの時の再現。しかし意識はハッキリとしている。

敵の誰かが呟いた。

「しっ、死神・・・・・・・・・・」

自分の姿を見て今の呟きに心の中で同意した。

そう思うのも仕方が無いだろう。今の俺を見れば誰でもそう思う。

返り血で湿った黒い服に黒い翼、紅い目。そして血のような色をした大鎌。

まごうこと無き死神。

俺は一気に片を付けることにした。

今まで以上のスピードで敵との距離を詰める。

やけくそ気味に飛んでくる魔法を避け、震える剣ごと首を刈る。

前衛を片付け、うざったかった魔法士共を刈ろうと思ったとき誰かが叫んだ。

「お前達っ！やめろ！」

そうして誰かが出てきた。

「誰だ、お前は」

「僕を知らないのか？僕はロリコン（としか聞こえない）・バーナク。このエルスで一番の魔法士であり、上位貴族だ」

なんか変なのが出てきたな。余裕そうな表情だし、そんなに強いのか？

「君はクラウド家のところ雇われてるのだろう？向こうの倍は出す。こっちにつく「断る」なっ？」

むかつくなこいつ。空気読めないしバカだしロリコンだし。

「御託はいい。エルスで一番なんだろう？かかってこいよ」

「せつかく生かしてやろうと思ったのに、残念だね」

ロリコンはそう言つと詠唱を始めた。うぜえし、なんかすごい隙だらけなんだがいいのか？

まあどんなのを使うか興味あるしまってやるか。

中略《大いなる風の力よ、その力を持って我が敵を切り刻め》

「死ねっ！」

風の刃が四方八方に現れ、一斉に俺に襲いかかる。

最初見てなかったのか？俺魔法消したじゃん。上級魔法らしいし、

かわいそうだし無は使わないようにしよう。

《闇よ、我が意に従い風を打ち消せ》

闇が広がり、風を受け止め、飲み込んでいく。

瞬く間に風の刃は消え、役目を終えた闇も霧散していった

弱っ！今のが上級魔法？闇とはいえ下級に負けるなよ！

ロリコン貴族は俺が生きてることが信じられないのかこちらをうつろな目で見ている。

殺す気が失せたな。脅すだけで終わりにしとくか。

「おいこの腐れロリコン貴族。これから一切ルシアに近づくのをやめろ。さもないと・・・・・・・・わかるな」

首に鎌をあてながら言う。

声が出ないのかガクガクうなずいてる。

なんかうざいので思いっきり殺気を出したら気絶した。うわあ、失禁してるし。

力を抜いたら鎌は石に戻り、翼も消えて目も戻った。不思議だ。

あれ？なんか静かだと思ったら魔法士みんな死んでる。ロリコン貴族のやつに巻き込まれたのか。

シーーーーーン

．．．．．戻るか。

俺はルシアのところに帰っていった。

――何とも言えない虚無感に襲われながら――

11話 あの日夢見た世界(5) (後書き)

一週間に2回以上は投稿するようにしたいな〜と試ってみたり。

誤字などがあつたら教えてください。

また、リクエスト等ありましたらこちらでも教えてください。

お願いします！

12話 あの日夢見た世界(6) (前書き)

はい、12話です。

総合評価200pt超えました！ありがとうございます！
本当に嬉しいです！

今回も短めですが楽しんでください。

12話 あの日夢見た世界(6)

宿屋――――――

やっと帰って来れたよ。宿屋。たった1日泊まっただけなのに昔から住んでいる家みたいに感じる。

濃すぎる1日だったなあ。夕飯食べる気力すら残ってないよ。

え？あの後どうなったかって？思い出したくないんだがな。

――――――
――――――

着いたな。実際は1分もかかってないけど。とりあえず報告しにくか。

さっきの客室の窓から入っていく。（オイ

中にはメイドさんよルシアが居た。ソ モンよ、私は帰ってきたー。

「ただいまー。ロリコンはきっちり締めてきました」

「おかえりなさいませ。結構早かったですね」

「レイさん、大丈夫でしたか？」

誰が言ったかすぐに分かるね。ルシアは心配してくれてありがとう。

メイドさんは相変わらずの笑顔。使者がどうなったかは聞かないでおこう。怖い。

「では、俺もそろそろ行かなきゃならないので」

「お待ちください。お渡しするものがあります」

報酬というやつか。前の貰ったあれだけでいい気がするんだがな。貰えるものは貰っとくか。

「着いてきてください。お嬢様は少々お待ちください」

「わかった」

「わかりました」

ルシア、そんな残念そうな顔をするな。悪いことしてないのに罪悪

感が。

「こちらです」

そう言われて着いた場所。言葉の通りそのまんま宝の山。直視できません。目に毒過ぎる

そんな金色の輝きに目を背けながら俺は訪ねてみた。

「それで俺は何を貰えるのか？」

敬語は無しだ。本人に素の話し方でいいと言われたし。

「この中からどれか一つです。なので早速選んでください」

あの中から？きついよ。目が、目が〜。

搜索中。荒探しです。

置いてあるものは様々。ただの金塊だったり金びかの切れなさそうな剣だったりガードしたら壊れてしまいそうな盾だったり。

どれも売ったら高そうだがそれは観賞用としての話。実際に使ったら使えないものばかり。

今の俺にとってはある意味ガラクタの山。

なので俺はメイドさんに聞いてみた。

「メイドさん、他に何か無い？俺には必要の無いものばかりなんだが」

「あります」

「無いよな」ってあるんだ！」

びつくりだよ。びつくりドンキーだ。

だけどなんで最初から教えてくれなかったのだろう。試されてたのか？

聞いてみたら大当たり。このくらい分らないと渡す価値がないそうです。

「では、着いてきてください」

そういつて部屋の奥の方に進む。途中においてあるものはメイドさんの魔法（風）で吹っ飛ばされている。

いいのか、メイドさん。というか魔法無詠唱だし。

「こちらへどうぞ」

地下への階段を下り辿り着いた場所。幾重にも鍵がかけられた扉がある。

メイドさんがそれを素早く解錠していく。

そして俺に、

「この中にあるものから1つ選んでください。私はここで待ってますので」

と言った。俺に部屋に入るよう促す。

中はかなり広く、学校の体育館ほどはある。その中に様々な武具が無造作に積まれている。

さっきのものとは明らかに違う。使う為に作られた一級品。魔法によって魔装化されてるのかもしれない。

自分好みのものを探す為に凶器の山を解体していく。危なっ！剣が落ちてきた！

探すこと10分。

未だにこれだというものは見つからない。もう三分の1くらい見たんだけどなあ。

そろそろ見つかれよと思いながら水晶の剣をどかしたら、黒と赤で彩られ、きれいに装飾された銃があった。

これは、すごい好みだ！かっこいい！

何より他のものとは違う存在感。君に決めた！

そうして俺は貰うものを決め、部屋から出た。

メイドさんがさつきと全く変わらない姿勢で待っていた。もちろん笑顔で。

「きまりましたか？」

「ああ、決まった。いいものが見つかったよ」

「そうですか。お嬢様のところに戻りましょう」

なんとというかメイドさん、無駄が無い。メイドさん最強。

で、戻ってきたらルシアがふて腐れて寝ていた。可愛すぎる。あの部分さえ無ければ本当にいいのに。

「ルシアも寝ちゃったし、俺は帰ることにするよ」

「そうですか。では、今日は本当にありがとうございました。あなたがいなければお嬢様がひどい目にあっていたかもしれない」

「それは気にしないでくれ。俺もいいものたくさん貰っちゃったしお礼を言いたいのはこっちの方だ」

「それでもありがとうございます」

大切なんだな、ルシアが。すごい伝わってくる。

「最後に聞きたかったことがあるんだが、なんで俺のことを何も訪ねない？怪しいだろ？」

「そんなことですか。それはお嬢様があなたのことを信賴していたからです」

「それだけなのか？」

「はい、それだけです」

「そうか。じゃ、俺は帰るので」

さいなら、そう言って窓から出てった。（オイ

そして今に至るということだ。あんま大変そうに見えないかもしれ

ないが大変だったんだぞ？主に武具探しが。

結局予定は朝食くらいしか澄ませられていないが、まあ良かったかなと思う。色々貰っちゃったし。

なによりルシアと会えた。それだけでいい。

この世界での知り合い。それが居るのと居ないのとはすごい変わる。

この世界は本当にいいな。

―――――そう思いながら俺は体を休めた―――――
―――――

魔法についての補足

今回少し出た魔装化についての説明。

魔装化とは、武器などに特殊な力を付与するものである。

例えば、斬りつけたときに火が出る、ただ単に切れ味がよくなる、

サビなくなる、持つだけで身体能力が上がるなど様々だ。
また、魔装化させる者の技能によっても能力に違いが出てくる。
重ねがけも可能だが、一つの物に2つ以上力を付与することはかなり難しい。

分類上は特殊魔法だが、属性を付与する場合は付与する属性が使えるのが条件となってくる。

これを専門とする職業もある。

今回はこれだけだが、魔法についてはまた補足する。以上。

12話 あの日夢見た世界(6) (後書き)

そろそろ矛盾が出てくるんじゃないか、口調がおかしくなってくるんじゃないか、行き詰まってしまうんじゃないか、などと心配してる作者です。

最近あまり書く暇がない……

感想評価アドバイスなどくれると喜びます。

あと、こんな魔法が出てほしい、こんな生物出してほしいなどありましたら教えてください。

13話 俺とギルドと異世界観光(1)(前書き)

ここで重大なお知らせがあります。

なんと、ユニークアクセスが一万を突破しました！
ホントにありがとうございます！

また短めだorz

13話 俺とギルドと異世界観光(1)

ギルド――――

いきなり来ちゃったよ。ギルドに。昨日のような目に遭いたくないからな。

ギルドに来る前のことで話すことは何も無い。昨日の朝とほぼ同じだし、朝飯も食べれたし。

まあそんなことはどうでも良いんだけど。

ギルドの中でも説明するか。

外観はかなり大きめの酒場のようになっていて、中も案外その通りだった。

中のほとんどは椅子とテーブルで埋まっていてまだ朝なのにも関わらずたくさんの人が居る。

朝は依頼を受けにここに来て、夜は手に入れた報酬で酒を飲む、という人が多いのだろう。

で、一番奥の方に受付があり、その隣に依頼などを貼ってあるスペースがある。

種族は竜族と天族以外はまんべんなく居る。魔族が少なめだが。

そうそう。最初は俺くらいの歳でこういう仕事って怪しまれるかなとか思っていたのだがそんなことは無く、同じくらいの歳のやつ

も結構居た

俺みたいに親が死んでるやつも結構居るみたいだな。悲しいことにもかく、まずは登録だな。俺は受付の方にむかっていった。

「ギルドに登録したいんだが」

「はい。そうでしたらまずは手首を出してください」

なんで手首？なにするんだ？

いきます、というかけ声とともにナイフみたいな物で手首に何かを彫られていく。不思議と痛みは無い。

動きが止まった。どうやら終わったみたいで、手首にはEという文字が黒く浮き出していた。

「では説明を始めます。今手首に彫ったのはギルドに登録している証です。文字はランクをあらわしていて、E、D、C、B、A、Sがあります。今はEになっているはずですよ」

こういうのはありきたりだな。だけど今はあのナイフみたいなのに着いて知りたいんだけど。後で聞いたら聞こう。

「ランクは特定の昇格用の依頼を受けることによって上がることが出来ます。依頼にも同じようにランクがつけられていて、基本的には自分のランクと同じランクかそれ以下のランクの依頼しか受ける

ことは出来ません。なので腕に自信のある人は早めに昇格用の依頼を受けることをお勧めします」

だったらさっさと昇格用の依頼を受けるか。腕に自信が無い訳でもないし。

「次は依頼失敗のペナルティについての説明します。依頼にはたいいていの場合期限という物が設けられていて、それまでに依頼を達成しなければペナルティとなります。ペナルティは加算されていく物で、3回までならば経歴に傷が着くだけです。4回目以降からは1つずつランクが下げられます。依頼失敗は絶対にしないようにしましう」

要するに身の丈にあった依頼を受けるってことか。例えばCランクに入りたての奴がCランクでも難しい部類に入る依頼を受けるとする。たいていの場合失敗するがもしその依頼が危険な物だったら死ぬ可能性が高くなる。まあそいつはほぼ確実に死ぬな。だからやめとけてことか。

「最後に二つ名について説明します。二つ名はBランク以上で特に能力の高い人につけられます。2つ名があるとランクが1つ上の依頼も受けることが出来るようになります。これで説明は終わりですが何か質問はありますか？」

「人数制限はあるか？」

「特にありませんが報酬の量は変わりません。依頼によっては人数指定の物もあります」

「他には特に無い」

「そうですか。では、ここに名前を書いてください。文字はこの国の物でもかまいません。自分で分かればそれでいいです」

文字は覚えたから大丈夫なんだけどどのにしよう。共通語でいいか。

「レイさんですね？これで正式にあなたもギルドに登録しました。これから頑張ってください」

頑張ります。

「話、聞いてましたか？」

「聞いてたけど何か問題でも？」

いまなぜか受付さんにおられています。悪いことした覚えはないけどな。

「は、まあいいです。昇格用の依頼ですね。これでいいです」

「ありがとう。夜にはまた来ると思うから」

「死なないでくださいね」

「もちろん」

受付さん優しいな。

じゃ、行ってくるか。

なぜだ。俺はどこで間違っただ。どうしてこうなったんだ。

「なんでまたあの森に行かなきゃならないんだー！ーっ！ー！」

そう。トラウマな森に来ています。貰った地図を見て進んでいたらいつの間にかついていた。

どうやらここに倒すべき魔物が居るらしい。ここに居る魔物っていったら思い当たるし、ギルドで見せてもらった魔物と似てる気がするんだが、違うだろ。そう信じよう。

「燃やそうかな。燃やしたら魔物も死ぬだろうしね。燃やそう」

駄目だ、俺。早くなんとかしないと。

なんとか自分を落ち着かせた後、もう二度と入るまいと思っていた森へ再び足を踏み入れた。

見覚えのある木々。ああ、燃やしたい。

心にどす黒い感情が。

それにしても折れてる木が結構あるな。もしかしたら俺が身体強化でかつ飛ばしてたときに折つてたのかもしれない。

ある程度進んだら木が途切れ、いつかの時と同じような開けた場所に出た。

そこには予想通りと言えばそれまでのだが、やはりいた。オオカミもどき、正式名称ウェアウルフ。絶対ゲームとかに居るだろ。

ん？なんかすごい目がギラギラしてるし怒り狂ってるみたいなんだけど、もしかして前に俺が殺りまくったから？あれは正当防衛なの。

ともかく、燃やそう。跡形も無く、燃やそう。ついでに木も、燃やそう。

先手必勝。武器は使わない。魔法だけで燃やし尽くそう。

いつもの倍以上の魔力とさっきからの怒りを込めて最もノーマルで感情的な詠唱を開始する。

《火よ、我が意に従え》

――作者の表現では表しきれないほどの爆発――

これなんて原爆？俺に被害は無いけどさ。原爆も実際に見た訳じゃないけどさ。

ほら、空を見上げてご覧。キノコ雲があるよ。周りを見渡してご覧。俺から半径2km位の範囲が更地になってるよ。

やりすぎた。後悔はしてないけど。むしろ達成感がある。

だけど、魔物討伐系のは証拠となる部位が必要だった。（今思い出した）

……探そう。あると信じて。

結局すごい苦労したけどなんとか見つかった。ちなみにウェアウルフの場合だと牙だ。

生きてる奴を探した方が早かったかもしれないけど気にしない。

これでDランクか。とりあえずBランクになるまではランクアップ優先にしておこう。

予想以上に時間がかかってしまった。

さて、街へ帰るか。

最近毎日ひどい目に遭ってるな。ホントにやめてほしい。

ギルドにはもう行ってランクをDに上げてもらった。驚かれたが気にしない。

自分の年齢がアレだったからだと思っけど気にしない。

腹も減ってるし何か食べに行くか。

俺は露店がある方へ歩き出した。

嫌な予感に襲われながら――

13話 俺とギルドと異世界観光(1) (後書き)

説明の部分がおかしくなっていないか心配な作者です。

おかしい部分があったら教えてください。直します。

そして何よりも感想ください。

贅沢を言つつもりは無いですがもう少し欲しいですOTZ

14話 俺とギルドと異世界観光(2)(前書き)

休みなのに更新が遅れてしまった・・・orz

しかもまた短い・・・orz

14話 俺とギルドと異世界観光(2)

ただいま食事中—————

パクパク、モグモグ、ゴクン。パクパク、モグモグ、ゴクン。パク
パク、モグモグ、ゴクン。パクパク、モグモグ、ゴクン。

うん。やっぱりこの世界の飯はおいしい。なんというか、とにかく
おいしい。

しかも安いし、このまま暮らそうかな。金は腐るほどあるし。

そうそう。これはさっき気づいたことなんだけど、この世界の野菜
とかは元の世界の物と名前以外は殆ど変わらない。

普通に店とかに名前は違えどニンジンやらジャガイモやらがちゃん
と置いてある。

一応料理はできるのでこれは個人的に嬉しい。場所さえあればたい
ていの物は作れることになる。

パクパク、モグモグ、ゴクン。パクパク、モグモグ、ゴクン。

なんてことを考えてるうちに食べ終わった。ふう、おいしかった。

なんというか、平和だな。最近毎日何かしらに巻き込まれていたから、すごく平和に感じる。

神様が休息を俺にくれたのかもしれない。神様が居たらの話だが。

さっき感じた嫌な予感も気のせいだ。きつと気のせいなんだ。疲れただけなんだ。

さて、どうしよう。どうせだからここら辺を見てくるか。ゆっくりまわる機会がなかなか無かったしな。

まだそこまで暗くもないしな。そうと決まれば早速行くか。

やはり、俺はこの時の判断を後悔することになる。が、今の俺にはそんなこと知る術は無い。

一通り見て回ったのだが、凄いな。特に建物が凄い。

中世のヨーロッパの建物と似ていて、なんだか圧倒される。異世界
なんだなぁと感じるな。

俺的には日本の木造建築が良かったのだがこればかりはどうしよう
もない。

あることを祈っとくか。望みは薄いが。

そろそろ宿に帰るか。疲れたし、眠いし、暗いし、そろそろ良い子は寝る時間だし。

さっさと帰ろう。そして寝よう。

俺は決めたら行動が早いんだ。

本日の災厄が降り掛かるまであと十分

そろそろつくな。

宿に着いたらすぐに寝よう。結構疲れた。

「・・・してよ」

なんか聞こえるな。路地裏の方向だ。

どうする？俺。これは明らかに面倒ことな感じだぞ？行くか？

でもなんか気になる。どうしよう。

・・・・・・行くか。

大丈夫だよ。見たらすぐ帰ればいい。見るだけだ。バレないように見てすぐ帰ればいいんだよ。

きっと大丈夫さ。今日の俺なら大丈夫。根拠は無いけど。

よし、行こう。

本日の災厄が降り掛かるまであと五分

ついた。

少し遠いな。もう少し近づくか。

よし。ここならバレないだろう。

暗くてよく見えないが大人の男と少女が居る。これは犯罪の匂いとするぞ。

声が結構聞きやすくなったな。これなら大丈夫だろう。

「離してつてば！」

「うるせえ！だまってるこのガキが！」

今思ったんだけどさ、この世界って悪人多くね？それも絵に描いた

ような奴が。

これも異世界クオリティというやつか。納得だ。

「離しなさいよ！この変態！」

「あん？今なんて言った？このくそガキ」

「変態って言ったのよこの変態！」

そろそろ切れてきたぞあの^{もう「これでいいや」}変態

どうしよう。助けようかな。だけどこれは助けたら絶対面倒なことになる。

「そつえば多少傷がついてもかまわないって言ってたなあ」

「な、なによ変態」

変態が少女を殴ろうとしている。どうする、俺。

「……………やっぱ見過ごせないな。後悔しそうだ。」

あの変態の計画を滅茶苦茶にしてやろう。それでストレス解消だ。

身体強化をかけ、準備OK。

カウント。3・2・1、GO！

「これでおとなしくsごぶっ！」

「よう、変態。なにやってんだ？」

いいねえ。何かをしようとしたところを邪魔するの。最高だ。

見ろよあいつの苦痛に歪んだ顔。気絶しないように蹴ったからなあ。

え？どこを蹴ったって？決まってるだろ。ナニだ。

ナニを気絶しない程度で思いつきり蹴り上げてやった。おそらく潰れただろう。

「だ、誰だ。お前はいつたい誰なんだ！」

もう復活したよ。声も震えてるがしつかりしてるし我慢強いのか？

まあいい。お前は誰だ！か。うん、決めた。

「俺か？俺は死神だ」

鎌を出し、若干の殺気を込めながらそう言う。

「ま、まさかあのバーナク家の屋敷を襲撃した最凶の死神って言うのは……」

バーナク家って何？最近襲った屋敷って言うたらロリコン貴族のところしか無いけど、もしかしてそれ？

うへえ。俺って有名なのか？最凶の死神ってなにその厨二病的呼び名。

ファンタジーな異世界だしギルドの二つ名制度聞いて覚悟してたけど結構クルものがあるな。

まあ確かにそれは俺だし正直に答えるか。

「よく知ってるな。確かにそれは俺だ」

おいおい、大の大人が10歳くらいの少年にびくびくしてどうする。

滑稽すぎて笑えるぞ。

「で、どうするんだ？といっても選択肢は少ないけどな」

「ん——————！」

にげたよ。しかも口あけてるのに声が出てない。

そんなに怖いかな俺。

なんかうざいから変態目掛けてそこら辺にあつた石を本気で投げしてみた。

「ん——————がつ」

命中。しかも頭だ。これは百点かな。

倒れたけど生きてんのかな。別に生きてなくてもいいけど。

なんか足音が聞こえてきたな。トンズラするか。

少女の方をしてみるとなぜかは知らんが気絶していた。

仕方ねえな。

そう思うと俺は気絶した少女をおぶって宿までの道をかけていった。

――俺はやっぱりお人好しなのか？とか考えながら――

14話 俺とギルドと異世界観光(2) (後書き)

皆さんはクリスマスをどうすごしましたか？

え？作者はどうすごしたんだって？

ははは。男2人で駅の花の水やりですよ。虚しすぎたね、あれは。

感想評価アドバイスなどくれると執筆速度がやや上方修正されます。

15話 俺とギルドと異世界観光(3) (前書き)

遅れて本当にすいませんでした。

理由というか言い訳ですが、やってなかった冬休みの宿題をやっ
てましたorz

しかも明日塾でテストorz

これからは以前のペースに戻したいと思います。

15話 俺とギルドと異世界観光(3)

宿屋についてるはずだった――――――

宿屋ってこんなに遠かったけ？　いつまでたってもつかないんですけど。

道に迷っちゃったか。てへっ。

とまあ現実逃避はさておき、今俺がどうしてるかというところと逃げます。

何から？　魔族です。はい。

俺は屋根の上を走って逃げてるのだが、相手には羽が生えてるから意味が無い。

聞こえてきた声から察するに今俺が背負ってるのは魔族で、詳しくは分からないがかなり重要な立場に居るらしい。

さっきの奴にさらわれて、それをずっと追ってここまで来たらしい。
で、なぜか俺が襲われている。明らかに勘違いです。本当にありが
とうございました。

後ろから無音の氷の刃やら稲妻やらがとんでくる。

どっからどう見ても無詠唱だ。しかも時間を考慮（今夜中です）し
てなのか魔法から音がしない。その優しさを俺に向けるよ。

無音の火球が俺の真横を通る。

ちよ、少しくらい遠慮しろよ！　なんかやばそうだぞ！　凄い魔力
を感じる。

「死にさらせーっ！」

物騒な叫びとともに魔力が解放される。

．．．．． 凄く、大きいです。

うん。凄くおっきな電気の龍が口を開けてこっちにむかっています。
バウ・ザ　ルガみたいな。もちろん音はしません。魔法って便利
だな。

ホントに遠慮しようよ。これくらったら背負ってる奴も死ぬぞ？

これはもうオーバーキルだよ。

どうしようどうしようドウシヨウドウスイYOU

正直あまり闇とか無とか使いたくないんだよね。ロリコン貴族のときは別にいいかと思っただけど、闇とか無とか使える人ってほとんどいないから凄いい目立つんだよ。

最凶の死神とかつけられちゃってるから今更な気がするけどさ。

とにかくバオ ・ザケ ガを無と闇以外でなんとかしなければ。

何がいいかな。んゝ水にしようか。それとも地にしようか。

どっちも使おう。

まずは、

《地よ、我が意に従い変形せよ》

斜め前辺りの地面にかなり深く穴をあける。

そこに、

《水よ、我が意に従い円形に広がり電気を地に流せ》

水を オウ・ケルガの正面に盾のように広がらせ、根元の部分を穴に突っ込んで奥まで行き渡らせる。ついでに電気が通りやすいように水は調整してある。

これで準備よし。かかってこい。

準備が終わった数秒後、水に思いつきりブチ当たる。

水が蒸発する音が聞こえる。水の盾が破られる心配は無い。かなり厚く作ってあるから。

だいぶ地面に電気が流されたのか、込められた魔力が少なくなってきたのか、徐々に小さくなっていく。

ザケガ、ザルと、どんどん規模が小さくなりついには消えた。

水蒸気で視界が悪い。それは相手も一緒のことなので今のうちに逃げるとするか。

ふう、ついた。おなじみの宿屋にやっとなつたよ。

「ひとまず少女を降ろすとするか」

とりあえず俺は少女をベッドに寝かせた。

顔を見たが、まごうこと無き美少女だ。これも異世界クオリティー。

まさかここまで危険な厄介ごとだったとは思ひもしなかったな。勘弁してほしい。

今回は自分のせいでもあるのが少しあれだけど。

神は俺を裏切った。元から信じてなかったから別にいい。

それにしても魔族って強いな。あんな強い魔法撃ってくるとはさすがに思ってたなかった。

無詠唱……俺も練習しようかな。魔族も使ってきたし、メイドさんも使ってたし。

何より便利そうだ。

こついうことは明日考えるとして、そろそろ寝るか。

ベッドの方を見る。

あ。

．．．．この部屋には座り心地のいい椅子があったな、うん。

さすがに一緒に寝るとかないし。

意外に椅子でも行けるかも。

そう思いながら俺は眠りに落ちてった。

「．．．．きなせい」

ん？

「・・・きなさい」

何だ？

「いい加減起きなさいって言ってるのよ！」

「うふっ」

????? 何が起きた？

俺は恐らく思いっきり殴られた腹をさすりつつ、目を開けた。

目の前には昨日俺が助けた少女が立っていた。

「やっと起きた」

しかもなぜか怒ってる。マジで意味分かんない。

俺はとりあえず言いたかったことを言う。

「もう少し寝ていいか？」

「ふざけないで！」

昨日寝るの遅かったからまだ眠いのに。

「あんたには聞きたいことがたくさんあるの。全部聞き終わるまでは絶対に寝させない！」

おーのー。ここまで性格がきついとは思ってなかった。シンデレな

らまだいいが、これじゃツンしか無い。

まあ、さっさと質問に答えて寝よう。眠すぎる。

「聞きたいことがあるならさっさとしてくれ。俺は眠いんだ」

「なっ！ ま、まあいいわ。じゃあ聞かせてもらっからね」

質問 1

「私をあの変態から助けたのはあんた？」

「一応そうだが」

質問 2

「あの変態ってあの後どうなったの？」

「知らん。死んでるかもしれない」

質問 3

「死んでるってもしかしてあんたが？」

「ああ。石投げたら頭に当たったから」

質問 4

「人を殺すことに抵抗は無いの？」

「今はもう無い」

質問 5

「あんたって何族？」

「多分人族」

質問 6

「あんたの名前は？」

「レイ」

質問 7

「何歳？」

「多分10歳」

質問 8

「これが最後の質問。あんたは私を助けてくれる？」

「・・・・・・・・・・ああ」

これで質問終了か。途中まで質問に答える度に顔が青くなっていて面白かったな。

最後の質問は、まあ美少女だし。

怒りも冷めたみたいだし、オツケーかな？

「ありがと。もう寝ていいわよ」

「お前はどうすんだ？」

「・・・もう少しここに居てもいい？」

「はあ。別にいい」

上目遣い反則だ。さて、寝るか。

俺は目を閉じた。

――きつい性格ってなんか厄介だなあとか思いながら――
――

魔法についての補足

今回は最近よく出てる無詠唱について説明する。

無詠唱とはその名の通り詠唱せずに詠唱魔法を使用する技術のことだ。

これを使えば相手に何を使うか、どのタイミングで発動するかなどを悟られずに魔法を使える。

ただし、これを習得するのは非常に難しい。

まず、大量の魔力があることが条件だ。なぜなら無詠唱で魔法を使う場合、普段の倍以上の魔力を使うからだ。

さらに使う魔法の細かい部分まで頭にはつきりと思い浮かべながらでなければいけない。

体から直接撃つ場合はともかく、何も無いところに発生させる場合はその空間に固有魔力をとどめなければいけない。これが大量に魔力が必要な原因でもある。

自然魔力を使えば難易度は少し下がるが、それなりの量が無いと発動できない。

なので、この技術を使える種族は天族、魔族、妖族に限られる。

今回はこれだけが、魔法についてはまた補足する。以上。

15話 俺とギルドと異世界観光(3) (後書き)

突然ですが、暇で少しでも興味のある方はぜひ、自分のもう一つの作品の「脇役で不幸な俺の異世界譚」を読んでもください。まだ全然文字数無いけど。
以上、宣伝でした。

あと、アンケートみたいなものをとってみたいと思います。

- 1． このままギルドの依頼をこなしながら国を巡る。
- 2． はっちゃけて学園編とかに行っちゃう。
- 3． 皓を出す。(覚えてる人居るか?)

皓を出すになると主人公がもとの世界と同じぐらいの歳になるまで飛ばします。

何も来なかった場合はその時の気分で作者が決めます。

アンケートは感想の方でお願いします！

15万PV+ほぼ2万ユーチュークの御礼(前書き)

見なくてもいいですよ？

15万PV+ほぼ2万ユニークの御礼

どうも、作者の能の無い鷹です。

先日、ついに15万PVとほぼ2万ユニークを突破しました。

本当にありがとうございます！

ほぼ2万ユニークというのは今は19884なので。

ホント自己満足の為に書いたこの作品がこんなにたくさんの方に読んで頂けるとは………

正直、夢落ちなんじゃないかと疑ってますww

これからも駄文ばかりでつまらなかったり、突然失踪するかもしれませんが、それでも良ければ応援してください！

頑張ります！

16話 俺とギルドと異世界観光(4) (前書き)

すいません。ごめんなさい。申し訳ありません出した。orz

予定は未定とか行つてたけどまさかここまで遅れるとは。

なぜここまで遅れてたかというと・・・

昨日塾のテストがあり、ネガティブな状態で帰ってきて、執筆を始めたけど全然かかなくて
気分転換にテレビ見たらもののけ姫のエンディングの部分で、無性にもものけ姫が見たくなつて家にあつたDVDをみて、風呂に入ったら湯船につかったまま寝てしまつて、起きたら完全にのぼせてて凄いいゝゝゝ、窓の外見たら日が出てて、もう嫌だーと寝てしまつて起きて時計見たら・・・という訳です。

本当にごめんなさい・・・

また、凄く変なテンションで書いたので中身が力オスなことになってるかもしれません

orz

16話 俺とギルドと異世界観光(4)

場所は変わらず宿屋です――――――

「ふうよく寝たな」

おはよーございます。レイ君です。かれこれ半日ほど眠っていました。

だって凄く眠かったんだもん。仕方ないよね。

あの少女はというと、なぜか俺の上に乗っています。

俺が寝ていたのは椅子なんだが……うん、せまい。

動こうと思えば動けるが、俺は動かない。それはなぜか？

分からない？　じゃあ仕方ない。俺の目に映る光景を懇切丁寧に教えよう！

さっき少女が俺の上に居って説明したよな。じつはこの子、寝て

います。寝てなきゃ殺されてると思うし。

え？ そんなこと分かってるって？ 大事なことから話したんだよ。

それにしても少女ってなんか言いにくいな。

言いにくいから、この寝ている少女は赤髪なので赤ちゃんと言おう。
実はこの赤ちゃん、結構胸がでかい。俺より少し年上ぐらいの年齢
としてはだが、少なくともD以上はある。

そして赤ちゃんは身長がそこそこある。150くらいはある。俺の
身長は130後半だ。

さて、ここで気づいた人は居るかな？

では、言っぞ！

赤ちゃんの豊満なお胸が俺の目の前にあるんだよ！

乱れた服から顔を出しており、形は良く、重力に逆らっているおっ
ぱい！

これを眼福と言わずしてどうする！

しかも若干触れてるんだぞ！ 柔らかくも少し抵抗のあるあの感触
が分かるんだぞ！

今日の俺はついてる！ 最高についてるぞ！

ずっとこのままでいたいな、と思ったとき俺の中で何かが目覚めた。

（胸に少し触れている。それだけで満足できるのか？ 答えは否だ！ 漢なら、その桃源郷にダイブしろ！）

応！　いくぜ！　俺は漢だっ！

ガバッ　むにゅ

「なっ、何？　ってレイ！」

そこで俺の意識は途絶えた・・・・・・・・

完

「起きろっ！このドスケベ！」

「うはっ」

どうやらこのまま終わらせてはくれないようだ。それにしても痛い。

「俺が何をやっただって言うんだ！　せつかく気持ちよく寝てたって言うのに！」

「嘘つくんじゃないわよド変態！　なんで私の下にいるのよ！　それに抱きつくなんて」

「うるせー！　そもそも俺に乗ってきたのはお前だ！　それに俺だって男なんだぞ！　こんな無防備で可愛い女の子みたら抱きつきたくもなるわ！」

「なっ、何言ってるのよ！」

「可愛いって言ってるんだよ！」

ここでレイの容姿について考えよう。

身長こそは低いが、顔にかかった髪を切ったからかそこそこかっこいい顔が出ている。

顔立ちはそこそこ整っており、目つきも見方によっては十分かっこ

良く見える要素になる。

しかも今彼は真面目な顔をしている。

さて、続きを見てみよう！

ぷしゅ、という擬音が聞こえそうな感じに赤ちゃんは赤面し、パタリと倒れた。

「は？・・・・・・・・・・・・・・・・ておい大丈夫か？」

返事が無い。ただのし屍のようだ。（死んでないよ

どうやら気絶したみたいで特に異常は無いっぽい。

少し外いくか。

涼しいな。

外は夕方、冷え始めた風が心地よい。

散歩でもするかと思ひ立ち、歩き始めた。

少し歩くと壁に変な物が貼ってあるのに気づいた。

何だこれ？　と思ひながら近づいて見ると、そこには………

やべー……！！！！

俺はその貼り紙をはがして持つと、すぐ宿に戻っていった。

ちなみに書いてあったのは、指名手配書。

顔こそ書いてないが身長が低い、鎌を使う、などの特徴が書いてある。

昨日石投げて倒した奴が見つかったらしい。そいつは死んでいたが、遠くからそれらしき物を見たという人がおり、こうなるに至った。

賞金は1ソル、つまり10万円。

比較的裕福なこの街だからこそその賞金の高さだが、それだけに狙う物は多く狙われている方にはたまったもんじゃなかった。

宿に帰ると脇目もふらずに自分の部屋に戻り、寝ていた赤ちゃんを叩き起こした。

「起きろっ!」

「なによ、うるさい」

俺は貼り紙を見せながら説明する。

「昨日の奴の死体が見つかって少しやばいことになってる。逃げるぞ！」

体に身体強化をかけ、部屋に置いた物をポケットに詰める。

まだ寝ぼけている赤ちゃんを引きずりながら宿屋の人に金を払うと外へ出た。

そして人気の無いところまでいくと、俺は赤ちゃんを抱き上げた。

「い、いきなり何すんのよ！」

「だまっとけ。舌噛むぞ」

そう言う俺は足に力を込めて全力で飛んだ。

「ちょ、高」だから舌噛むぞ」はい」

少し切れ気味に言ったら素直に黙った。

地面からかなり高く、人からは黒い点にしか見えないところまで来ると俺は魔法を使った。

《風よ、我が意に従い北へ俺を吹っ飛ばせ！》

最後の方がむちゃくちゃだったがしつかり発動した。

風は凄い勢いで体当たりし、俺は吹っ飛んでった。

下の方に街の外壁が見える。どうやら出られたようだ。

そっぴや俺がなぜ北と指定したかというところ、街で散策してるときに買った付近の地図を見て北の方に国境みたいな物があった気がするからだ。

どこの国とものかは知らない。

俺は凄いい勢いで吹っ飛ばされていった

――天族との国境だったらやだなーと思いつながら――
――

国の位置に着いて

なんとなく各国の位置が分かったという方がいい気がするのでここで
書いとく。

簡単に説明すると、

竜

魔

天

中立

妖

人

獣

という感じだ。

分かりにくいかもしれないが、これはあくまでも簡単に説明したからだ。

勘違いしないでよねっ！

16話 俺とギルドと異世界観光（4）（後書き）

そついやもう一つ皆さんに聞いておきたいことがあった。

アンケートの結果出たら、結果からできた新章を今の話（俺とギルドと異世界観光のことです）の途中で強引に突っ込むか、いまの話が終わってからにするか、です。

これも何も来なかったら作者の気分で決めます。

アンケートの期限を書いてなかったのでここに書いておきます。

1月13日までです。

よろしく願いします！

17話 俺とギルドと異世界観光(5)(前書き)

また遅れてしまった。

短いけれど気にしないでください。

そして初の主人公以外の視点！
もう意味がわから無いです。

17話 俺とギルドと異世界観光(5)

Q・ここはどこですか？ A・ここは「ネタバレ」ですー

――――

やばい。着地のことを考えてなかった。

というか風が異様に頑張り過ぎじゃね？ 街から少し離れたところまで飛ぶつもりだったけど、なんかでかい壁みたいのが見えるぞ？

俺の方が壁より高い位置にいるから激突することは無いけど。

赤ちゃん？ また気絶してるよ。大丈夫かな？ いろんな意味で。

それにしてもでかい壁だな。それに頑丈そうだ。機会があつたらどのくらいの強度か試してみたい。

そろそろ降りた方がいい気がするけど、どうしよう。壁越えてからにするか。

そつえば、あれ？ 何だっけあの町。えーっと、そうだ！ エル

スだ！

で、エルスはどうなってんのかな。犯人が俺だとは分かってないと思う。第一もう街には居ないし。

正直、あのまま居てもバレなかった気がするけど、それは考えないことにしよう。

赤ちゃんそろそろ起きてくれないかなあ。お姫様だっこは疲れたよ。腕ではなく精神的に。

壁を越えるとなるとまだ時間がかかるな。暇だ。

・・・ちょっとだけ寝るか。うん、ちょっとだけ。すぐ起きるから大丈夫。

おやすみなさい。

このころ、エルスの街のとある屋敷では……

私は今、一枚の手配書を見えています。明らかに知り合いです。

レイ様です。捕まってませんよね。

先程大きな魔力が街の外へ出るのを感知したので恐らく大丈夫だと思えますが。

全く、お嬢様に挨拶の一つもよこさずに……

あ、私はみんな大好きメイドさんです。主人公以外での初視点となります。

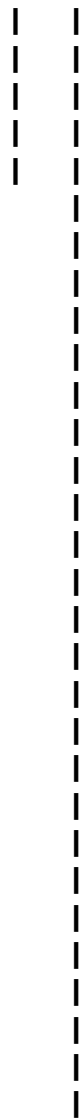
よろしく願います。ペコリ

これから私はお嬢様に紅茶を入れてくるので。

大したおもてなしも出来ずにすみません。読者様。（オイ

また機会があればそのときはしっかりおもてなしさせていただきます。

それでは。



痛い。

壁を越えて辺りで減速しながら降りてたら、起きたらしい赤ちゃんになぜか殴られて落ちた。

起きるのがもう少し早かったらどうなったことやら。

俺は腰の辺りをさすりながら文句を言った。

「お前！ 飛行中に人を殴るな！ 死んだらどうするんだ！」

「う、確かにそうかもしれないけど。でも起きたらお姫様だっこされてるのよ？ びっくりするじゃない」

「お前が気絶する前からしてましたけど？」

「うるさい。あと、私の名前はお前じゃなくてフィーラ。魔族よ」

「へーお前って魔族だったのか。意外だな」

「だからお前じゃなくて、フィーラ！」

「はいはい。フィーラ、これでいいか？」

「なんかむかつく」

それにしても本当に意外だな。まさか魔族だったなんて。

そう言えば魔族は飛べるはずだよな。無詠唱で魔法ぶっ放してくるおっかない魔族を俺は思い出す。恐かったな。

じゃない。魔族は飛べるからこいつも飛べる。わざわざ俺が抱える必要は無かったんじゃないのか？

言ったらまた殴られる気がするからやめておこう。

フィーラか。なんかやだ。俺の脳内では赤ちゃんになってる。真の名前は赤ちゃんという設定にしておこう。

一つ思ったことを口にする。

「前にフィーラを助けたとき、魔族に襲われたんだが心当たりは無いか？」

「魔族って言われてもたくさん居るし、特徴とか無いの？」

「人の話を聞かないで無詠唱で魔法撃ってくる危険人物だったが」

「……その人って私のこと探したりしてたわけ？」

「聞こえた言葉から察するにさらわれたのをずっと追いかけてきたらしい」

「知ってる。その人は私の護衛兼教育係だった人」

「やっぱり知ってたか。で、やっぱりフィーラはやんごとなき身分なのか？」

「ま、まあそこそこ」

「そうか……どこどこ分かる？」

「私が知ってるはず無いじゃない」

「ですよ〜」

やっぱり迷ってたんだ。若干現実から目を背けてたけど、周りは深い『森』だ。

燃やしたい。すごい燃やしたい。ファイヤーしたい。いいかな？
いいのかな？

発作が起きる前にさっさと抜けてしまおう。

「フィーラ。ちょっと飛んで空から周りがどうなってるか確かめてくれないか？」

「いいわよ。じゃあ少し行ってくるわね」

とりあえずフィーラに頼んで空から周りを確かめてもらっ。飛べるじゃねえか。

今のうちにすっかり存在を忘れてしまった銃がどんな感じなのか確かめてみることにした。

まずは撃つ。もちろん木を。

・・・弾が無い。魔装化されてるっぽいから魔力を使うのか？

純粹な魔力を少しだけ込めて撃ってみた。

バン！

普通に弾出た。魔力を使う銃か。ファンタジーすぎる。今更だが。

弾は木を貫通してる。威力は結構あるようだ。

しかし魔力を殆ど込めてないのにこれでは本気で込めたらどうなるのだろうか。

試してみたい気もするが、とりあえず今はやめておく。

「レイ！」

フィーラが帰ってきたみたいだ。

「ここがどこか分かったか？」

「分かったも何も、ここは、魔皇国デモンストレイ。魔族の国なの！」

「は？」

あの壁はどうやらエクトラインとデモンストレイの国境を示す物だったらしい。

なんてこった。

絶望した！

――もう少し早く気づけば良かったと思いながら――
――

17話 俺とギルドと異世界観光(5) (後書き)

メイドさん登場！

これからもたまに出現します。

それにしてもアンケートどうしよう。

答えてくれる人が居た時点で予想外だが、結果がドングリの背比べ過ぎる。

少し考えておかなくては。

あと、感想評価アドバイスなど、あつたらください！

18話 俺とギルドと異世界観光(6)(前書き)

また遅れた。

本当にすいません。

遅筆にもほどがある。 o r z

18話 俺とギルドと異世界観光(6)

で、結局ここはどこなの？ んなの知るか！――――

「そろそろ街についてもおかしくないはずなんだけど」

「うるさい」

皆さんこんにちわ。最近地味に無詠唱の練習をしているレイです。

あの後、思う存分絶望してから、赤ちゃんがあっちの方に街が見えたと言ったのでそちらの方に歩いていました。

しかし、着きません。もう一度吹っ飛んだ方が速い気がします、それはあまりやりたくないです。

理由？ そんな野暮なこと聞くなよ。

……正直に言うと、魔族が怖いからです。

吹っ飛びを完全に制御する自身は無い、という理由もあるけどそれはあくまでおまけ。

原因はあの無詠唱魔族さんです。はい。

まあ、正面から戦えば負けることは無いと確信はしてるが、無音の上級魔法連発はさすがに……

なんかまた襲われる気がする。（これはフラグです）

あれから魔族に妙な恐怖心があるので、目立つことは避けたい。魔族に警戒されたら死亡フラグだ。

ともかく、吹っ飛ぶのはよほどのことが無い限りやる気は無い。

さらにここで衝撃の事実発覚！

なんと、この2人（俺と赤ちゃん）は、3日くらい野宿してるのだ！

食べ物はメイドさんからもらった四次元ポケットから。

寝る時は、穴掘りました。怖い魔族さんの時に地面に穴をあけてたけど、それと似た感じ。魔法って便利だ。

唐突に思ったけど、俺って魔力切れなんじゃないんだろう。

魔力栓は確かに広がってる感覚あるけど、そこから滝のようにドバドバ流れてるんだよね。勿体ないくらいに。

ドバドバ流れてると言っても、体に溜まるわけじゃなく、かといって垂れ流しになるわけでもない。

電気よろしく他の物体に流れ込むのだ。ただし自然に出来た、木や地面、水などに限るが。

ちよつと話がそれたな。

で、俺は常に魔力栓からドバドバ出てるし、無などのかなり魔力を消費する魔法を連発してるわけだ。

不思議に思うだろ？

ここで少し魔力に着いて説明しておくが、固有魔力、体内にある魔力の出所はどこか分かるか？

答えはもちろん魔力栓だ。だが、魔力栓から出てくる魔力はどのように作られた？ またはどこから来た？

答えは今のところ分かっていない。

昔、偉い魔法士が生涯をかけてその行方を追ったらしいが、それでも分からなかったらしい。ある文献によれば、その魔法士は真実にかなり迫ったらしいが。

一説によれば、体は常にマナを吸収しており、その吸収した魔力が

魔力栓を通って出てきてるとか。

この説は明らかに穴がある。俺みたいに魔力栓がどでかい奴がいたら、すぐに周囲のマナが無くなり、吸収できなくなる。

他にも様々な説があるが、どれも何かが足りなくて、真実にたどり着けていない。

出所が分からないのに常に多量の魔力を出してるので、いざというときに何かあつたら困る。

だから俺は心配なんだが……

「……い」

その道の専門家に色々聞いてみたいな。

「…え……い」

俺自身でも研究したいな。この件については。

「レイ！」

「ホワッツ！」

びっくりした。いきなりなんだ？ 変な言葉を発してしまったではないか。というか、なんかデジャブ。

「なんだ？ フィーラ。いきなり大声出すな」

「レイが全然反応しないからでしょ！」

「はいはい、俺が悪かったです」

「全然反省してないし」

僕は何も聞いてません。

「ん？ そろそろ街に着く？」

「ええ。レイがぼーっとしてる間に空から見たから間違いないわ」

「そうかそうか。そいつは良かった」

本当に良かった。野宿はさすがに飽きたし、街に着かなきゃ食料の補給や情報収集が出来ない。

「んじゃ、さつさと行きますか」

そついうと、俺たちは歩みを速めた。

――建てたフラグに気付かないまま――

S i d e ? ? ?

ようやく見つけた。あの誘拐犯。

なんで魔皇国に戻ってきたかは分からないけど、何かしらの目的があるに違いない。

フィーラは妙に奴と打ち解けてるけど、騙されてる。

それにしても本当にフィーラは手がかかるなあ。

可愛いからいいけど。

まあいい。

早くフィーラを助け出して、あの誘拐犯をブチ殺して、帰ろう。

フィーラと一緒に、帰ろう。

魔皇国デモンストレイ、その首都。

皇都エルレガンへと。

城へと。

魔法についての補足

今回出た、固有魔力のことについての補足。

作中にも書いてあった通り、固有魔力の出所は分かっていない。
分かっていることは、

どこからか出てきた固有魔力は魔力栓を通じて出てくる。

魔力栓が固有魔力の発元では無い。

今の所マナとの関連性は薄い。

このくらいだ。

そして少しネタバレ。（個人的にはネタバレじゃない）

固有魔力の量や質は感情に左右される。

発生もとは、この世界でも非現実的な物。

全然ネタバレじゃない。

今回はこれだけだが、魔法についてはまた補足する。以上。

18話 俺とギルドと異世界観光(6) (後書き)

一応、アンケートの結果です。

このままギルドの依頼をこなしながら国を巡る、に決まりました！
学園の方も結構入ってたので、もしかしたら出るかもしれません。

皓は・・・・・・・・うん。

分かりにくいアンケートだったと思いますが、答えてくれて本当に
ありがとうございました！

19話 俺とギルドと異世界観光(7) (前書き)

かなり遅れてしまいました。

かなり文章がおかしくなってると思うので注意してください。

短いです。また。

19話 俺とギルドと異世界観光(7)

野宿生活からの解放、街に到着――――

やっと見えてきたな、街。名前知らんけど。

さすがに足が痛い。早く休みたい。もう限界だ。精神的にも肉体的にも。

必要な者だけ補充したらさっさと宿に泊まるか。金ならいくらでもあるし。

あと、魔導書が一冊くらい欲しい。今までは馬鹿魔力と無と闇の二属性でなんとか生きてたけど、これからもそうなる保証はない。

「おいフィーラ。お前はこの街に来たことあるか？」

「無いわ」

「即答かよ」

「悪い？」

「別に」

「ならいいわ」

「お前なんか機嫌悪くないか？」

「気のせい」

「嘘だ！」

なんて馬鹿な会話をしている内に目の前まで来てた。

なんか街の前の看板に何か書いてあるな。えっと、

「アブルト、か」

街の名前かな？ よくわからんけど。

ていうか、この街結構でかいな。看板に気を取られてたけど、街の周囲はすっかり外壁に囲まれてるし、街の入り口は見張りが居る。

とりあえず、さっさと入るか。

「フィーラ、行くぞ」

「ん」

「疲れてんのか？ さっきから静かだけど」

「そ、そんなわけ無いじゃない！ 私は元気よ！」

「絶対嘘だな。そんなに疲れてんなら尚更だ。さつさと」

行こうぜ？　と言おうとした瞬間、とてつもなく嫌な予感がして、上体を思いつきり反らした。

ヒュッ！

さつきまで自分の居た空間を毒々しい液体が塗られたナイフが横切った。

俺はとつさにナイフが向かってきた方向を見る。

そこには黒いフードを深くかぶっている、見るからに怪しい奴が居た。

あらららら？　どこかで見たことのあるような……

「フィーラ！」

「ゲッ！」

この声は確か……あ！　無詠唱魔族さんだ！

「レ、レイ。全速力で私を抱えて逃げて。アレに捕まったら終わり。地獄を見るはめに」

「フィーラ！　よかった！　あの誘拐犯に何かされてない？　死ねっ！　消えろ！　この変態誘拐犯！」

凄いすれ違いだな。なぜか知らんがめちゃくちや嫌われてるな。俺、何かしたっけ？

「は、早く！」

「お、おう」

急かされたのでフィーラを抱えて逃げようとした、が

「くたばれ糞野郎！」

という声とともに5本のナイフが進行方向に飛んできたせいで立ち止まってしまった。

抱えたフィーラとともに伏せ、咄嗟に土の壁をイメージした。

詠唱をしていないにも関わらず、土の壁が音を立てて出来た。

ナイフは無詠唱で作られた土の壁に弾かれ、散らばった。

・・・やれば出来るじゃん俺。

魔族さんやる気満々だな。まずは誤解を解くか。

「お「変態と話すことなんて何も無い！ 消えろ！」・・・い」

ひどい。いくら何でもあんまりだ。こんな仕打ち。

「フィーラ。アレなんとかできないのか？」

「無理。思い込みが凄い激しいし、冷静じゃなくなってるから何言っても無駄。というわけで、なんとかしなさい」

無理だから。

「冷静になつたらなんとかできるか？」

「まあ、たぶん」

自信なさげだな、心配だ。

はあ。気が乗らないけど、無理矢理落ち着かせるか。武力行使で行くことに決定。

身体強化、OK。武器、とりあえず刀。呼吸、整ってる。

さて、逝きますか！

――――魔族恐いよーとか実は思いながら――――

魔法についての補足

今回は作者の短絡的思考の産物である魔導書についての補足、というより説明。

魔導書とは、主に魔法の固有詠唱が載っている書物のことをさす。固有詠唱は何を引き起こすのかが明確に定められているので、深くイメージをしなくてもしつかり発動する。

他に例外として、持ち主と契約するタイプの魔導書もある。

しかし、それは世界に10冊あるかないか程度しか無い。

詳しくは出てきたときに説明する。

・・・苦し紛れに色々書いてみたが、正確には決まっていらないので変わる可能性もある。ごめんなさい。

今回はこれだけだが、魔法についてはまた補足する。以上。

19話 俺とギルドと異世界観光(7) (後書き)

うん。ごめんなさい。

書く暇がなかなか見つからなかったんだ。テスト期間だし。

次は多分テストが終わる2月23日以降になると思います。

あと、総合評価1000ポイント突破！

本当にありがとうございます！

50万PV+8万ユーチューブの御礼と少し謝罪。(前書き)

本編とは全く関係ないです。

50万PV+8万ユニークの御礼と少し謝罪。

えゝまずは、有り難うございます!!

50万PVですよ!？ 8万ユニークですよ!？

こんな駄文の固まりのような作品をこんなにたくさんの人が読んでくれるとは・・・あれ？なんかデジャブ。

それと、ごめんなさい。更新が遅れまくってます。

忙しいのもあるんですが、なんか文章が思うように書けなくて・・・

・
なんとか文章能力を上げなきゃもう見てられないほどだし。

それに今年が受験なんですよ・・・

今はともかく7月くらいになったら全く更新が出来なくなります。

作者は頭がよろしくないんで、死ぬ気で勉強しなければ死にます（ハア？）

とにかくこんな駄目駄目作者ですが、これからよろしく願いし

ます！

更新じゃなくてすいません。少し聞きたい事が・・・（前書き）

これが最後だ！

更新じゃなくてすいません。少し聞きたい事が・・・

またまたすいません。本編じゃないです。

相も変わらず詰まってるんですが、読み直してみたところ、ここ変えた方がよくね？というものがたくさん出てきまして。

ということで、アンケートです。優柔不断な作者を許してください。

1、このまま何も変えずに続ける（作者にとって修羅の道）

2、変えちゃっていいから続ける（変えるのは俺とギルドと異世界観光の（3）から）

3、今は休め（これを後回しにして他の作品を進めます）

4、いつそ全部書き直せ（これは、案外いいかもしれない）

何もこなかったら作者がサイコロとかコイントスとかで決めます。

アンケートにご協力お願いします！期間は5月まで（ながっ！）

アンケートにご協力有り難うございました。

結果から言つと、4番。つまりは新しく書き直す事になりました。

正直、修羅の道じゃなくて安心してゐる自分が……

まあ、やるからには徹底して頑張ります（至らない所はあるけど）

それと、ありきたりですが書き直した方は新しく改訂版として出します。

この場所は、こんな理由で消すと駄目っぽいので残します。

改悪になる可能性もありますし、原型が残らない場合も無いとはい切れません。

そこまで酷くはしたくないけど。

受験生でもあるので遅くなると思います。

最後に、中途半端になってしまって申し訳ありませんでした。完結は絶対させます。

ヒソヒソ。

なあ、前より暗い話になるって噂だぞ。

まじかよ。作者の能力だと酷い事になりそうだぞ。

俺もそう思う。

どうするよ。あいつの事だからシリアスばかりになるだろ。

たまに思い切りブレイクしそつだな。

改悪になる予感。

フヒヒｗｗサーセンｗｗｗｗいやごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6856i/>

エンディング・ワールド

2010年10月9日14時10分発行